

42196

教科書文庫

4
810
42-1925
20000 44020

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

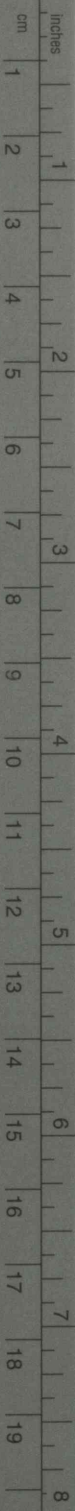


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

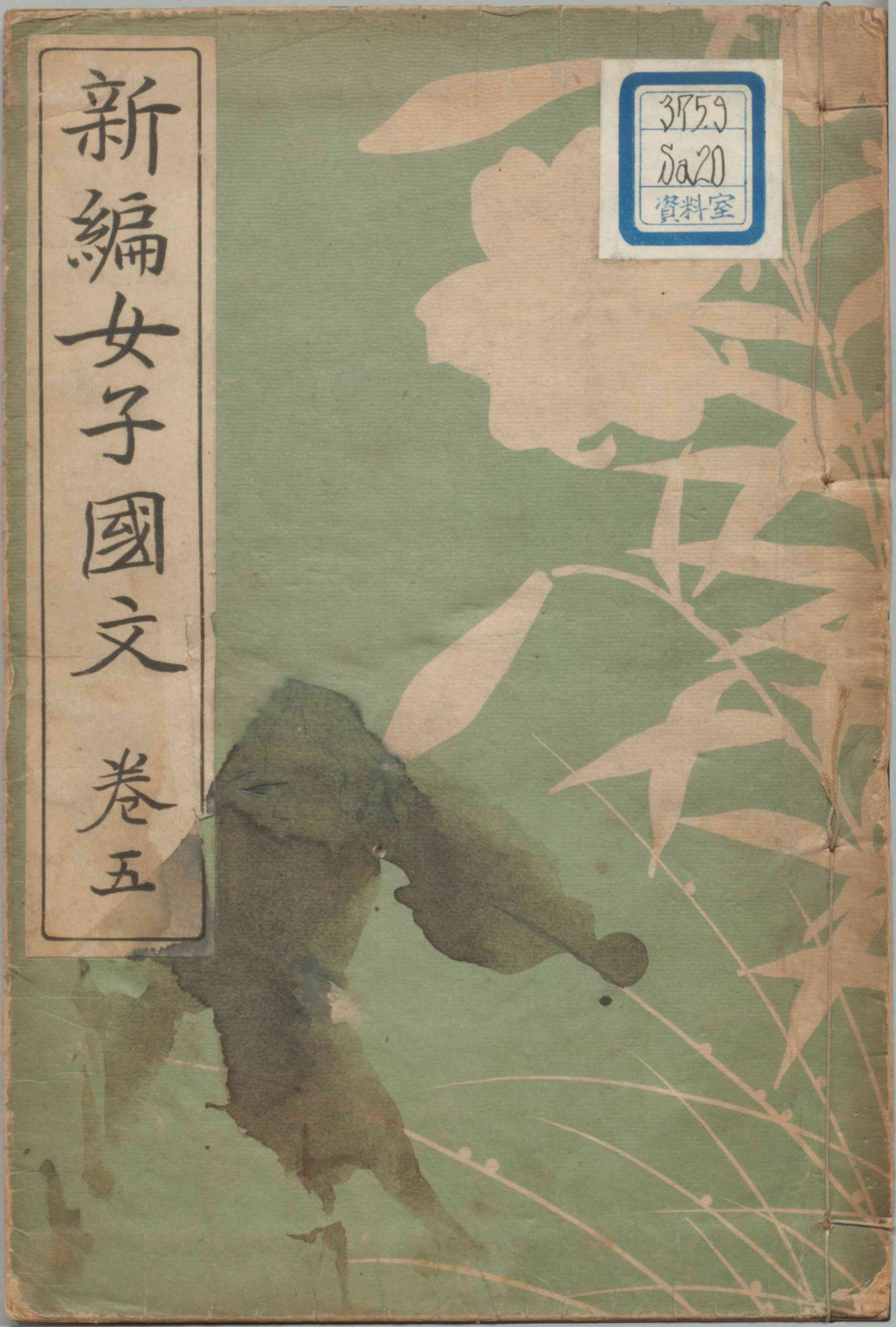
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



3P59
Sa20
資料室

新編女子國文 卷五



資料室

日十二月一年四十六大
濟定檢省部文

用科語國校學女等高

新編女子國文

佐藤球
大島庄之助
共編

社會式株
院書治明

375.9
Sazō



目次

一 靈感	マードン	一
二 櫻の日本	佐々政一	八
三 平等院鳳凰堂	落合直文	一八
四 昭憲皇太后十二徳の御歌		三三
五 皇室に關する敬語		三七
六 ポンペイの埋没	杉村楚人冠	三三
七 水車	尾上柴舟	三七
八 一寸したことで	北原白秋	四〇
九 忙しいかな米國	上原敬二	四〇
一〇 山路の雲雀	夏目漱石	五七

一一	山吹の花	菊池寛	三六
一二	形	若山牧水	三九
一三	山寺	正岡子規	七
一四	信濃路	岸上質軒	六
一五	春日局	小林一茶	壺
一六	をさな子		次
一七	一茶		一〇四
一八	女流の俳句	大庭柯公	一〇六
一九	蛸壺	室鳩巢	一一三
二〇	杉田壺岐	林久男	一一八
二一	ブロッケン山の遭難	岡本綺堂	一二五
二三	花火		

二三	清水	荻原井泉水	一三
二四	渚	國木田虎雄	一三七
二五	作文	島崎藤村	一三九
二六	原總右衛門の母	下田歌子	一四二
二七	南京の壺	柴田鳩翁	一五三
二八	ナイチンゲール		一五六



新編女子國文卷五

一 靈 感

譬喻談に斯ういふのがある。

「仔獅子が、或日母獅子の眠つて居る間に、森の中で獨り遊び戯れてゐた。色々變つた物が氣を引くので、仔獅子は一寸探検をしてみようといふ心になり、遠くまでさまよひ出たが、遂に歸路を見失ひ、何時の間にか迷ひ兒となつてしまつた。

仔獅子は、驚いて、氣も狂はしく、八方に走り廻はり、悲鳴を

舉げて母を呼んだが、母の答は無かつた。疲れ果てて、せんすべ無くなつた時に、恰も好し、此の頃仔を失つた羊が之に出會つた。羊は憫れな啼聲を聞付け、仔獅子の近くに來てやさしく世話をした上、遂に養子として其を引取つた。

羊は此の養子を愛して育てたが、其の中に、其が羊より大きくなり、時には何だか薄氣味悪く見えるやうになつて來た。其の眼の底には、羊には了解が出来ない、不思議な光を見る事も度々あつた。

當分の間は、養母と養子と共に幸福な月日を送つて居たが、或日向うの山の彼方に、空を壓して大きな一頭の獅子が雄姿を現した。其の獅子は、房々とした鬣を振つて、谿谷に木

魂となつて鳴り響く様な吼え聲を發した。母の羊は恐れて立竦んだ。併し此の不思議な音聲が仔獅子の耳に達した時に、仔獅子は魔に打たれたやうになり、是まで嘗て覺えない感じがした。全身がぶる／＼と震ふやうな氣がした。その獅子の吼え聲は仔獅子の心の底の琴線に觸れ、これまでに無い新しい力を生ぜしめたやうに感じたのである。新しい欲望と云ふやうな力の、不思議な自覺が發生したのである。

新生の力は仔獅子の心を動かした。是に於てか、仔獅子は自ら何をするのかも考へずに、殆ど自然的に獅子の吼え聲に應じて吼え返した。其の中自己の内に勃然として起つて來た新しい力、それによつて、自ら恐怖と驚愕の念に怯えな

がらも、一旦覺めた此の仔獅子は、情深い眼で母羊を見やりながら、向うの山の獅子の方へ飛去つてしまつた。

迷ひ兒の仔獅子は、自己を發見したのである。此の時迄、仔獅子は小羊のやうに、母羊の傍に遊び狂つて居た。仲間の者が爲し能はぬやうなことが出来るとか、普通の羊に比して、格別大きな力を持つて居ようとは、夢にも想像しなかつたのである。況して山中の百獸を威服し得るやうな力が、自分にあらうなどとは夢想だにしなかつた。彼の考は只單純な羊の考で、犬が見えたら逃げ、狼の哮えるのを聞いては戰慄するものとししか思つて居なかつた。然るに今は是等の犬や狼が、己れを見て直ぐに逃げ隠れるに至つたのを見て、自ら

驚いてゐるのである。

仔獅子も、自ら我は羊なりと思つて居た時には、羊の如く臆病で因循であつた。随つて羊だけの力と勇氣しか持たず、到底獅子の力を出し得なかつたのである。他から注意するものがあつても、中々獅子の力など出せるものか。私は普通の羊である。普通の羊と違つた所は無い。他の羊の爲し得ぬものは私にも到底不可能である。と云ふに止つた。獅子と云ふ自覺が出来た今日、此の仔獅子は茲に心機一轉して、新しい動物となり、山中に於ても、豹と虎の外には競争のしても無い森の王となつたのである。自覺は確かに彼の力を二倍、三倍、或は幾層倍にしたか判らない。此の力は彼が獅子の咆

哮を聞く前の瞬間まで、彼には全然不可能のものであつた。仔獅子の自覺を喚起した向うの山の獅子の咆哮が無かつたなら、仔獅子は永久羊の生涯を續け、遂に自己の内に潜在した獅子性を知らずに濟んだのであらう。さればとて、獅子の咆哮は、彼の力に一物をも加へた譯では無く、單に内に在つたものを喚起し、己れに持つてゐた物を喚び覺したのみである。が、己にかゝる大発見が出来た後は、仔獅子は最早羊の生涯に満足し得られなかつた。獅子の生涯、獅子の自由、獅子の力及び山野は己に彼の物であつたのである。

各個人の内には眠れる獅子の性格がある。唯問題は、如何にして之を喚起すべきか、何物がそれを自覺し、その心の

奥底を搔動かし、その内に潜在して眠つて居る力を引き出すものであるかの點である。

それは偶然外部から覺されることもあり、又内部から自發することもある。又其の機會に逢遭しても、平凡な者はこれを空々に看過することが多い。

一旦其の靈感に會へば、恰も仔獅子が一旦目覺めてからは、羊の生涯を送る事に満足しなかつた如く、私どもも亦唯の肉塊にあらざる、人間以上のものであることを自覺し、神性を有することを知り、凡庸衆愚の生涯に満足し得ぬやうになるであらう。乃ち私どもは、己れの内正に湧上らんとする新しい力を感得し、再び、浮薄なる理想や、安價なる成功

國文學者

文學博士

東京高等師

範學校教授

大正六年歿

近世國文學史

に満足することが出来なくなり、愈々向上心を起し、次第に高き地位に向かつて憧憬するに至るのである。

(マードデン著如何にして希望を達す可きか—上谷續の譯に據る)

二 櫻の日本

佐々木 政一

花見といふことが年中行事の一つとなつて、老幼男女、貴賤貧富、打連れて花下に遊ぶといふ風俗は、西洋にも支那にもない。全く日本獨得のことである。

蓋し、世界には日本の櫻のやうな派手やかな花もなく、又日本人ほど花の好きな國民もあるまい。支那の桃李は専ら彼の國の詩人に歡ばれ、西洋の薔薇や草花は、主としてその

公子行

制延世

可憐桃李斷腸花

代悲白頭朝

洛陽城東桃李

飛來飛去落

誰家

朝日に匂ふ

「敷島の和

心を人とはば、

朝日に匂ふ山

櫻花。」(本居

宣長)

敷島は和心

の枕言葉

人が私に大和心

を私にこころ

から思ひわた

らば、それは朝

にてり、櫻の

花の光の様に

ありませう。

青丹よし

萬葉集、太宰

少貳小野老の

歌。

上流社會に玩ばれる。然るに日本では、花盛りの噂には、其の

日暮しの貧困者でさへも浮かれさせられるのである。朝日

に匂ふ山櫻のやうな大和心は、畢竟その間から生まれて來

たのであらう。

和歌は、千年の昔から、何よりもまづ月花を好題目として

之を詠じた。人類が未だ野蠻の域を脱しない時代に、我が大

和民族のみは、既に櫻花の美にあこがれる風流心を持つて

ゐたのである。さりながら、遠い日本の上代には、まだ今日の

やうには、到る處に櫻が繁つて居なかつたに相違ない。

青丹よし奈良の都は咲く花の

匂ふが如く今さかりなり。

二 櫻の日本

九

見渡せば
古今集、素性
法師の歌。

と謠はれた奈良の都こそは、名にし負ふ八重櫻も追ひ／＼
に植ゑられたことであらうが、それにしても山城の新都の
やうに、

。花ありに京を見やりてよむ。
見渡せば、柳櫻をこきまぜて、

接頭語

みやこそ春の錦なりける。
秋の時節紅葉も居あはれとて
とよみ小こか出来よ。

といふ程の美しい都ではなかつたであらう。殊に花の名所
として、日本隨一の名ある吉野山にさへ、奈良朝時代には未
だ櫻は一向なかつたらしい。吉野の歌は數へ切れぬほど萬
葉集に見えてゐるが、たゞ山川の美しい景色を反復してゐ
るのみで、生くと櫻は歌つてない。日本が櫻の國となつたの
は、蓋し平安遷都以後のことであらう。
桓武天皇延暦十二年(四五四)

世の中に
古今集、在原
業平の歌。

世の中に絶えて櫻のなかりせば、

手紙 未来をうけす
す 未来あり

業平
在原業平。

公卿等らけり名
フワリ音便

春のこゝろは長閑けからまし。
かまことありませし

いつまでか
古今集、素性
法師の歌。

と、業平朝臣の詠せられた頃、即ち平安朝の初期が、花見とい
ふ風俗の始めて盛になつた時代である。今日も櫻狩、明日も
花見の宴と打續いた春の賑はしさ、なかに心に心長閑に暮
す日もないといふのは、最もよく花時の盛況を偲ばしめる。
櫻女の面白きにいつまでも
いつまでか野邊に心のあくがれん、

花し散らずば千世も経ぬべし。
なかつたならは十年も経れをなかめて居よであらう。

愛惜の心にひかれて、暮れるも知らず花の蔭にさまよふ様
を歌つた歌は、眞にその數が知られぬほどである。まして咲
くを待ち、散るを惜しんだ歌は、指を屈するに違がない。

花にそむ
千載集に出づ。

吹く風を
千載集に「吹く風を勿來の關と思へども道もせに散る山櫻かな。」

花や今宵の
平家物語に、「一行きくれて木の下かげを宿とせば、花や今宵の主ならまし。」

兼好
吉田兼好。此の記事は徒然草に在る。

一朝厭離の心を起して佛門に歸依しても、
 花にそむ心のいかで残りけん、
 棄てはててきと思ふ我が身に。
 と西行は自ら怪しんでゐる。花にひかるゝ心は、遁世の僧にも残つてゐたのである。
 又、「吹く風をなこそその關」と詠じた源義家や、花や今宵の主
 人ならまし」と歌つた平忠度は、武士ながら花を愛づる心は
 忘れなかつた。源平以後の戦亂の世にも、平清盛は西八條に
 花見の宴を張つた。吉野朝騷擾の際ですら、田舎者は花の下
 に集つて酒飲み歌を作ると、兼好は記してゐる。況や足利時
 代の小康に遭つて、花見の盛であつたことは、謠曲や狂言に

奥羽地方をます
 女中の園にまかり
 ける時を三つての関
 にて花の散りけり
 はあめり。

花を見つて
 居る中に日か暮れ
 て櫻の水の下に病
 をもちとらたらは
 今晩もつたしなく
 川、まは花であ
 ろう。

太閤
豊臣秀吉。

醍醐の花見
慶長三年三月、秀吉は花を山城醍醐三寶院に觀た。一代の豪華を極めたものといふ。

見てのみや
古今集、素性法師の歌。

よつてさへ歴々と知ることが出来る。かくてこそ、かの關達
 な太閤の醍醐の花見といふ、前後無比の大觀櫻會が開かれ
 たのである。
 平安朝の花見風俗も、鎌倉室町のそれも、さして懸隔があ
 つたとは見えぬ。時としては邸内の花見もあつたが、大方は
 野山に出て、花の下に筵を設け、辨當を開いて、終日遊興に耽
 つたのである。それも多くは主なき花で、
 見てのみや人に語らん櫻花、
 手ごとに折りて家苞にせん。

(觀阿彌)
 儀樂、田樂、土御門、
 一踏三三出末々物
 の親曲ヲ謠曲ト
 言フ。
 今様ハ
 平家物語
 世阿彌
 能樂南行
 戲劇諸語
 フラナルモノ
 櫻評
 花遊人

折りどらば
古今、讀人不
知の歌。

風流
風雅
即ち古き風流
殺風景

だ歌も甚だ古くからある。
折りどらば惜しげにもあるか櫻花、
いざ宿かりて散るまでは見ん。

近世、徳川期に入つては、久しき昌平につれて、花見は愈盛
であつたが、その初は頗る殺風景なものであつた。足利期の
末には、鑄槍を擔いだお伴を連れて、花見に出ることがあつ
たと見える。流石に戦國武士は、花見にも武備を怠らぬやう
心掛けてゐた。然るに泰平な徳川期になつても、なほ寛文の
頃までは、小身者さへ、花見といへば態槍持・鐵砲持などを従
へて出たやうで、武器を携へて威風堂々としかつめらしく
練り出す花見は、今日から思へば随分無風流極つたもので

あつた。

どきもせぬ、鎧や伴のかつぐらむ
花見す、供衆の放す鐵砲はあ
たじとこや歸る雁かぬ
何事や花見の人の長かきま



花見小袖

斯かる衣裳の美しさのみならず、歌舞音曲も盛に演奏され

併し、かゝる風俗は久しいも
のではなかつた。やがて御大身
も草履取を従へたのみで、槍や
鐵砲は花の山には見られぬや
うになつた。これに代つたのが
花見小袖の伊達模様で、男女と
もに漸く華美を競うて、貞享元
祿の盛期には、花の美も衣裳の
美に氣壓されるやうになつた。

花の山歌よも人や踊らん
人の心をあきらめし伊勢踊

吉野山去年の
新古今集、四
行法師の歌

て、果は男女打群れて花の下に踊り狂つた。元祿の花見は既に風流人のみの花見ではなくなつた。即ち一振となつた。

吉野山去年の枝折の道かへて、去年吉野山に行つて道を作らざりしか 今年道をかえて違ふ方向の花を見

まだ見ぬ方の花を尋ねん。よう。

と、道もない山陰を辿つて、淋しい花を眺めたのは既に昔の事で、東山祇園或は清水の花の下蔭に、暮うち廻はして花毛氈を敷き、とりぐの遊興に、蒔繪の重箱に山海の珍味といふ贅澤でなくては、花見らしくは感じなくなつたのである。思ひ起せば、余が十幾歳の頃には、近くは東山、遠くは嵐山に、男女打連れての花見といへば、まづ大風呂敷の辨當は小者に提げさせ、男達は一瓢を携へつゝ、ぞろぞろと朝早くか

ら出かけたものである。麥畠の間に蓮華、蒲公英の點綴する野路を辿つて十町も行く頃には、女連は着物の裾を端折つて、子供等と摘草を始める。男達は瓢箪の口を開く。雲雀や鶯に稍興を添へて、花の蔭に行きつくまでには、もはや半ばは春色に酔うてゐるのである。殊に十三参りといつて、嵯峨の虚空藏に、今年十三になる子供を心ゆくばかり著飾らせて、花見かたぐい参詣させる。それを親や兄弟が伴なひ行く綺羅びやかな同勢が、太秦御室の邊を練りゆく姿は、今もまざまざと見えるやうで、京染の華美を盡くした友禪模様嫁入衣裳にしては派出過ぎる好みが、やがて十三参りの特色で、これが又元祿の花見姿をさながらに傳へたといふべきで

あつた。「醒雪遺稿」に據る

三 平等院鳳凰堂

落合直文

平等院鳳凰堂は山城國宇治にあり。こはもと源融（源融）の別莊なりしを、後に御堂關白之を別業（別業）となし、その子宇治の關白賴通之を傳へて寺となし、平等院とは號せしなり。鳳凰堂はその佛殿なり。永承六年の建築にして、今より殆ど八百七十餘年前のものなり。

抑、奈良朝の寺院は、なかく（なかく）に今に残れるものも少からざるに、平安朝のものは、多くは足利末世の兵燹（兵燹）にかゝりて、存するもの少し。彼の法勝寺、法成寺のごときも、いかに（いかに）めで

起シテ
歌の新機運ヲ
号スル
國學者
明治三十
六年歿す。
源融
河原左大臣。
嵯峨天皇の皇
子。
御堂關白
藤原道長。

法勝寺
白河天皇の創
建。
法成寺
道長の建立。

たかりけんを、今はその一つをだに知ることを得がたし。
さるに、この堂のみは、都を去ることの稍遠きからに、今日
まで其のまゝに残りて、當時の文華の燦然たりしを知らし
むるは、いかに貴からずや。我等、京攝間に遊ぶ毎に、必ずこの
堂を見る。見る毎に愈、めでたくて、いつも陽春の候、百花の咲
匂へるに向かへるが如し。

偕、この堂を鳳凰堂とし、いふは、その構造によれるなり。
其の様、中央の樓を鳳凰の體に象どり、左右の樓をその兩翼
に象どり、後背の廊をその尾に象どれるなり。其の高さ、廣さ、
寸分を加減すること能はず。げに名匠の建築と覺えたり。そ
の中央、高樓の屋上の兩端に雌雄の銅鳳あり。こは、もとは金

鳳凰
支那の空想し
た瑞鳥
瑞鳥と云ふ
天下道ヲレハ即
アラハル

螺鈿
屋久貝
蝶貝
貝類
あまがひ

上品 上品 上品
中品 中品 中品
下品 下品 下品

定朝
佛師。後一條
天皇時代の人。

爲成
長曆中の畫家。
中納言俊房
源師房の子、
文才あり。

銅なりきと見えて、今なほ金色残り、殿内に祀れる本尊は、

阿彌陀如來にして、定朝の
作なり。天井は格子にて、悉
く銅鏡・金銅・瑠璃等を箱入

し、螺鈿七寶を鏤めたり。
欄間に二十五菩薩の像

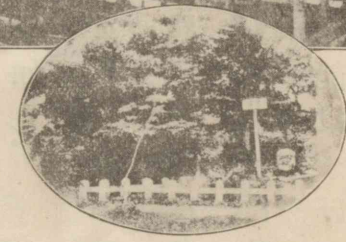
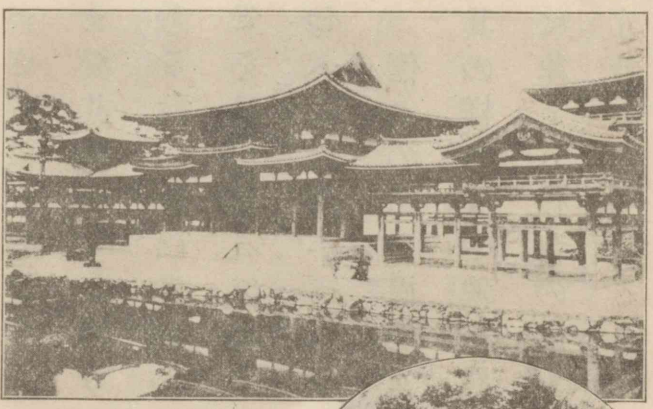
を掛けて雲中供養の體を示したり。

四壁及び三方の扉に淨土九品の説

相を畫がきたるは、繪所の長者たり

し爲成にて、その上部の色紙形に、觀

音經の文句を書したるは中納言俊房卿なりといひ傳ふ。あ



芝の扇と院等平

橋の小島が
崎
宇治川の先陣
にて開えたり。
生嗟磨墨
生嗟は佐々木
の、磨墨は梶
原の乗れる馬。
宇治の網代
の歌
上句は「伊勢
武者は皆緋緘
の鍔きて。」

はれ、如何ばかり愛でたかりけんを、今は剥落して、たゞそれ
とたどらるゝのみ。堂の前面に、阿字の池ありて、いと物寂び
たり。釣殿はこの池の側にありて、その中なる佛も珍しきも
のなりと聞きしかど、入りては見ず。入口に、頼政の扇の芝の
跡ありて、碑を立てたり。堤に上りて見れば、前に滔々として
流るゝは宇治川にして、向ひにたゞなはれるは宇治山なり。
幽邃にして壯快なる、全國第一といふべし。宇治橋はこゝよ
りは左なり。この下流に遙かに見ゆるは橋の小島が崎なり
とぞ。生嗟磨墨の嘶、今なほ聞ゆるが如く、宇治の網代にかゝ
りけるかな。と詠みたる昔も偲び出でらる。橋を渡りて行け
ば、常光寺といふあり。放生院また橋寺ともいふ。かの大化二

年に、釋道登が建てたりといへる宇治橋の碑はこの寺にあ

りと、かねて聞き居れば行きて見る。

竹の荒垣結ひめぐらして丁寧に保

存せり。川ぞひになほ行けば、離宮八

幡宮あり。下の社は、菟道稚郎子尊を

祀れりといふ。あはれ、この地よ、鹿の

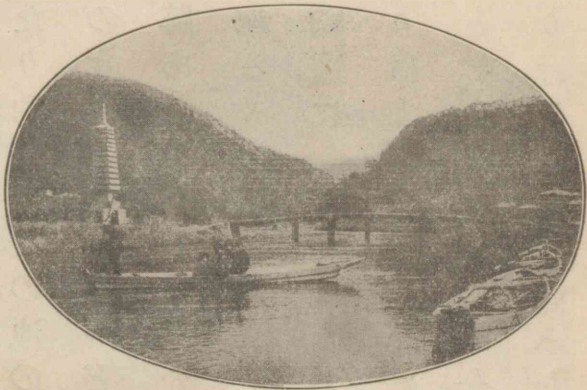
聲、螢の影、千鳥、氷魚などによりて、昔

より名高きのみならず、かく歴史の

跡をさへ定かにとめて、行人をし

てたやすく過ぎがたからしむるは、いかに尊き處ならん。こ

の山の神、この川の神の、高き御徳さへ偲ばれてなん。



宇治川

大正三年四月十日崩御
嘉永元年五月十八日生誕
故従一位孫忠彦公の三女
御名 美子

(萩の家遺稿)

四 昭憲皇太后十二徳の御歌

節制

春の花見や秋の紅葉狩の折につけての酒宴も金こけよと云はるは

花の春紅葉の秋のさかづきも、
ほど／＼にこそ酌ままほしけれ。

清潔

眞白の所衣服の塵は誰れも気か付てはらつてしまふけれ

白たへの衣の塵ははらへども、
憂きはこゝろのくもりなりけり。

勤勞

磨かすば玉の光は出でざらん、

それと同じ様に人にも浮明してはトめて其の人の徳が表われるのである。



昭憲太后御影

沈黙

餘り多過ぎるのほたりないのと同じようにいけなみのあふ過ぎたるは及ばざりけり、假初の

こと葉もあだに散らさざらなん。

確志

人心かゝらましかば、白たまの 白たまはどんを強火で焼いてもやけな、人かかようになつてほしもの またまは火にも焼かれざりけり。

誠實

とりく 花はあふけりて につくる挿頭の花もあれど、

にほふこゝろのうるはしきかな。

溫和

亂るべきをりをばおきて、花櫻 花櫻の散る時はならはま、まつ咲き始る時やこい時をなならんものであふ。

まづ笑むほどをならひてしがな。

謙遜

高山の影をうつして行く水の、 なからしかも

ひきいにつくをこゝろともがな それかひい、方に流れて行くその謙遜と云ふ小三三三人は持ちこたふ。

眞美人の意味
挿頭語

順序

奥ふかき道もきはめん物事の

もとすゑをだにたがへざりせば、

節儉

吳竹のほどよき節を違へずば、

すゑ葉のつゆもみだれざらまし。

寧靜

いか様に身は碎くとも、村肝の

こゝろはゆたにあるべかりけり。

公義

國民をすくはん道も、近きより

おしおよぼさん、とほきさかひに。

五 皇室に關する敬語

大日本は神國なり。神孫相繼ぎて萬世一系の皇位を踐み給ふ。かみは上又は神にて、天皇は上即ち神にまします。現つ御神と稱へ現人神と申し奉るも其の故なり。すめらみことは天下を統治し給ふ御方の義にして、みかどと申すは、うちつけに御身の上を申すを憚りて、宮門を指していへるなり。漢語を用ひては、天皇、皇帝、至尊、聖上、主上、今上等と申し、又、陸海軍を統率し給ふより大元帥と申す。高御座、天位、寶祚、宸極等は皇位を申す語なり。

みや(御屋)みくるま(御車)みゆき(御行)の如く、みを冠して敬稱とし奉ること多し。みゆきを行幸、臨幸といひ、還りますを還幸、還御といふ。太皇太后、皇太后、皇后、皇太子、皇太子妃のいでましを行啓といひ、還りますを還啓といふ。又皇族方のいでましを御成といふ。

みくるまを車駕、龍駕といふ。乘輿、鳳輦、鸞輿は御輿なり。故に「鸞輿いづくにまします。」車駕某地に幸す。などいへば、やがて天皇を指し奉る語となる。

みやは御居處なり。九重内裏、御所、皇居、宮城といひ、又禁中、禁裏、禁廷、禁闕、鳳闕ともいふ。行幸の間、しばし留らせ給ふを駐蹕、又は駐輦といひ、其のおはします處を行宮、又は行在所

といふ。鹵簿は行幸啓の行列なり。

天皇の御見聞、御感想、御思慮を稱し奉るには、みそなはず、聞し召す、おぼしめす等の古語の外、漢語にては天聞、天聽、天覽、天徳、叡感、叡聞、叡慮、聖聞、聖旨、聖鑑、宸襟、宸慮の如く、天、叡、聖、宸等の語を冠すること多し。又御尊體、御容貌、御動靜に關する敬語として、玉體、龍體、天顔、龍顔、玉步等を用ひ、御寫眞、御畫像には御影、聖影といひ、御寫眞に限りて御眞影ともいふ。出入せさせ給ふを出御、入御といひ、御座を玉座といひ、臨時の御休憩所を便殿といふ。

天皇の御言は、おほみこと、みことのり、又上諭、敕諭、敕命、敕語、綸言、宣旨、御沙汰等と申す。宸翰、宸筆は御書なり。御作の詩

歌を御製といひ、御盃を天盃といひ、御機嫌を天機といふ。
皇太子を東宮と申し、又春宮、儲嗣、儲君、儲貳と申す。皇子孫の生まれさせ給ふを降誕といひ、内親王、女王の臣下に嫁し給ふを降嫁といふ。

寶算聖壽は天皇の御齡なり。天皇及び三后のかくれまを崩御といひ、皇族には薨去といふ。

天皇及び三后の敬稱に陛下、皇族の敬稱に殿下を用ふべきは、皇室典範に明かなり。

かくの如く皇室に關する敬語は極めて豊富なり。上古皇室にのみ用ひたる敬語にして、めすおぼすのたまふの如きは、中古以來、或は攝關に、或は將軍に、尙廣く移りて一般貴人

に對する敬稱となりたれども、其の大部分は儼として使用を誤ることなし。これ君臣の分あきらかなる我が國體の然らしむる所にして、他國に其の類例を見ざるなり。

(高等小學讀本)

六 ボンペイの埋没

杉村楚人冠

埋没はれて見えなくなること

ヴェスヴィオ火山の東南麓、サルノの河岸に沿うて、カンパニアの都ボンペイといふのがあつた。紀元前五百年代に出來たといふ古建築が、今なほ廢墟の中に残つて居る所から推すと、今から二千四五百年前には、既に可なりの街が建つて居たものらしい。その地は、山を負ひ海に臨み、日麗かに

新聞記者。
名は廣太郎。
ヴェスヴィオ
オ
伊太利ナポリ
瀨頭の噴火山
カンパニア
古羅馬時代に
於ける中部伊
太利の州名。

第17世紀の中頃に、纔かにその所在

羅馬の領土
西曆紀元前八
九十年の頃

ポンペイ
上古、南イタ
リヤにあつた
町。ナポリ灣
に臨んでヴェ
スヴィオ火山
の麓にある。

風清き處とて、早くから摺紳の別墅別荘を列ぬること、我が邦の大磯、鎌倉の如くであつた。それが羅馬の領土になつてからは、いよゝゝ榮えて、正しく一世の風流華奢をこゝに極はめた。

花に戯れては春の日の長きを短しと唧唧ち、月に浮かれては秋の夜の長きを明け易しと怨み、上下皆蕩々乎として、さながら、この世をばわが世とばかり、遊戯三昧三昧に日を送つたポンペイの街は、紀元六十三年二月五日の大地震に、家は倒れ人は死して、さしも壯麗を極めた街衢街衢は、忽ちにして落冥たる焦土に歸し、復、去にし日の倂倂を留めずなつた。これより年を経ること十有六年、倒れた家は建ち、毀れた街は繕はれ

て、辛くも舊の姿に立ちかへつた。然るに、紀元七十九年の八

と山火オイヴスエヴ
市イベンボたれらせ掘發



月二十四日に、今度はヴェスヴィオの大噴火があつて、三日二夜降續けた熱灰の下に、あはれ、ポンペイは、この世からなる焦熱地獄と化して、塵も残さず埋れてしまつた。

爾來跡頃、ポンペイは名にのみ存して、何處にあつたかさへわからなかつたことが約千六百年、第十七世紀の中頃に、纔かにその所在

が知れて、それからおひ／＼に發掘されたのが、今のポンペイの廢墟である。今では、伊太利政府の事業として盛に發掘を行ひ、凡そ全市の三分の二は、既に掘り出してしまつたといふ。

この掘り出されたポンペイ市のすぐ前で、我等は今しもナポリ發の電車を降りた。

北の方雲を凌いでヴェスヴィオの火山が見える。ヴェスヴィオは七十九年の噴火前幾百年の間、まるで火山と知られぬくらい静まり返つて、その頃は、麓から山腹一面、寸土も耕されざるはなく、唯頂上に残つた礫确不毛の平地ばかりに、やうやく火山の名残を留めてゐたといふ。所がこの罪も

なささうな山が、一朝爆然として破裂した。何時かは隙を覘つて噴き出さうと構へてゐた全山の火氣が、忽ち土を破り石を飛ばして、猛然として立騰つた。立騰つた熱灰焦土は颯と八方に落ちて、瞬く間に四邊の山や川や村や里を埋めて了つたのである。噴火は八月二十四日の早朝に始り、降りしきる大雨に交つて、煮えかへる泥の流は、西の方ヘルクラネウム市を埋め、雲のごとく空高く搖曳した灰燼は、折しも吹き出した西北の風につれて、ポンペイ市の上に落ちた。ポンペイには、始は胡桃ぐらゐの燒石がころ／＼と降つて地上八九尺を埋め、次に、雨と共に落ちて來た火山灰が、その上七八尺を埋めたといふ。その間に、大地は絶間もなく震ひ、火焰

ブリニー
西曆七九年歿す。

が揚り、石が落ち、灰が盛に降り、雲が低く飛ぶ。天地は黑白を辨ぜぬ眞の闇となつた。閃々たる電光が海にも陸にも閃き渡り、轟々と凄じい物音が到る處に聞えて、之に交つて迷惑ふ男女の阿鼻叫喚の聲は、慘澹たるものであつたと、羅馬の史家ブリニーは書いてゐる。

三日目になつて、始めて鎮つた。鎮つた後のカンパニアの野をいかにと見れば、ポンペイ・スタビエの兩市は、唯、纔かに屋の棟を灰の中から見せたばかり、ヘルクラネウム市に至つては、影も留めず、永へに地の底深く消え失せて了つたのである。

それより後、鬼哭啾々たること一千八百歳。一千八百歳以

死する人の聲がアケテシク、ナククト

前のポンペイ市は、またもや世に出で、今しも我等の眼の前に在る。

我等は停車場前に設けた改札口を通つて、スタビエ通りの門に入つた。ポンペイ全市が、今は一種の博物館のやうになつて、入場料を徴して、朝の七時から夕の五六時まで、一般の縦覽を許すことになつてゐる。(半球周遊)

七 水 車

尾 上 柴 舟

のほらば瀧に續くらん、
岩切りとほし行く水の
流の岸に小屋見えて、



文學者。
文學博士。
東京女子高等師範學校
教授。
名は八郎。

あやふくかゝる水車あやふくかゝる水車

たゞかりそめの板ぶきに、
のせたる石も苔むしぬ。
さゝぬ窓より見入るれば、
守り居る人はまだ若し。

か何處モオトスレテ来タテアロウ

山のあらしやたちぬらん、
人にしられぬ谷の花。
あをき流をいろくに
染めてもこゝによりて來ぬ。

水車ヲオトスレテ来テアロウ

つと汲まれたる山ざくら。
たゞしろたへに一めぐり
めぐると見れば、打續き
のぼる椿カトナギのくれなるや。
み山の春を手すさみに、
汲みては又も汲みこぼし、
長き日中ねもすあかぬまに、
くるまも老いんはた人も。

水車

タケクワコワレニ

感動詞

ソノ音ヲレニ年ルトモ老ルルアリ

詩人。
名は隆吉。

八 一寸したことで

北原 白秋

心柄といふものは、ほんの一寸した言葉の端にもあらはれるものである。

銚子。
千葉縣の町。

私の居た寺の坊さんに、或時銚子行の川蒸汽船の話が出たので、此處から銚子までは餘程でせうね。」と訊くと、「いやたいた賃錢風流の無名人でもありません。」と坊さんが答へた。私は里數を訊いたのに、坊さんは大變な事を答へたものである。それで、此の坊さんがどんな人であるかを私は知つた。

だから、其の後に、其の坊さんが、田圃の蛙が鳴いたら、石油をおかけなさい。」と云つた言葉にも、私はさまで驚きはしな

かつた。

古池や
芭蕉の句。

古池や。蛙飛込む水の音。

初夏
ササユキが歌ふるるの夜、細女、寂しい

大變な違ひではないか。

又或時、或三人の男が膝を交へて坐つて居た。其の時バナナをお盆に山ほど女中が持つて來た。其のバナナ、はまだ青かつた。之を見た瞬間に、一人が「はあ、いゝな。」と云つた。一人は、「だめぢやないか。青いな。」と云つた。一人は、「全く小笠原のは値ばかり高くてね。」と云つた。三人とも親しい友達であつたが、一人は畫家で、一人は商人、あとの一人は其の珈琲店の主人であつた。畫家は、其の特色の輝きを觀た。商人は味ひを感じ

八一寸したことで

四一

た。そして其の店の主人公は値を考へて、一緒にはつと思つたのである。此の中の誰の心が一番尊く磨かれて居たか。畫家は、無論輝いた青い色を觀たばかりではあるまい。其の輝きの底に潜むバナ、の生きた命其の物を觀通したに違ひない。

又、斯う云ふ事があつた。

或歌自慢の人が眞間に訪ねて来て、私に歌を見てくれと云つた。大概斯う云ふ人の「見てくれ」は「教へてくれ」と云ふのではない。驚いてくれ。「褒めてくれ」と云ふのである。私はさういふ人の心持は能く解つて居るし、ほどくにしてゐる。斯

眞間

作者の住んで
いた千葉縣東
葛飾郡の町。

う云ふのはいけないのだ。」と云つた所で、のぼせて居るので解らう筈は無し、先方で本當に教へられたいといふ謙遜の心が無い以上、私の方でむきになつてやり込める必要は無い。成るべく、せいぜい批評水準線を低めて、少しでも好い所が有れば、それを見てやつて、まあ結構です。位にしてしまふでなければ、第一私の時間が、役に立たぬ事でつぶれて了ふし、只もう頭を下げて、一時も早く歸つて貰ふ方が好い。何を云つたつて、お天狗様には解らないのだから、ひとり手に歌のむつかしさに恐れ入つて、始めて顔を赤くする時節を待つてやるより外は無い。獨りで居て、自分の歌に顔が赤くなればしめたものである。

そこで、其の人も、さう云ふ人だと直ぐに見て取つたので、まあ散歩でもして見ようと、一緒に連れ出したものだ。歌の自慢など聞くより、外へ出て雲でも見た方が、どれだけせいせいするかも知れない。どうせ時間をつぶすなら其の方がよい。其の人は途中も何かしらしゃべつて居たやうだが、私は夕方の空や、田圃の景色にばかり眺め入つてゐたのである。

まだ赤い夕焼が、西の空には残つて居た。眞間の小川の土手の上を歩いて居ると、ふと其の人がしゃがんで小石を拾つた。何をするのかと見ると、何と云ふ可憐な繪模様だつたらう、私は思はず立ちどまつて了つた。

其處には鮮かな裏白の葉の川楊かはやなぎが水の面に揺れて居た。其の撓んで揺動いて居る一つの枝には、まだ小さな燕の子が一羽留つて居た。又一羽來た。枝は愈、揺れる。枝の先は水へ付いて波を立てて居る。燕の子達は紅い頬を揃へて、さもさも恐しさうに啼立ててゐる。又一羽留ると、枝は愈、揺出した。ともすると滑り落ちさうになるので、今は必死となつて縄りついて居る。其のつやくした黒い裂羽さきば、いたいたけな啼非レシウチきイタケナナリ聲。それだけでも可愛いのに、又一羽羽ばたいて、つい近くまではやつて來る。枝の上の燕の子はそれを見て、慌てて「いけない、いけない」と啼く。是以上留つては枝がすつかり水に漬つて了ふのである。空の一羽は留るには留られず、寂しさう

に啼きながら、翔つては近寄り、近寄つては又翔け出す。

其の燕に向かつて小石を投げたのである。

私ははつとしたが、それでも黙つて居た。寂しい氣持で頬笑みながら、私は又何氣無く歩み續けた。さうして或處まで其の人を送つて行つてから、左様なら、又お出でなさい。」と別れの挨拶をした。それで歌は到頭見ずじまひである。見なくとも、もうどれだけの歌か解つて了つたのである。無論、どれだけの歌を作る人かも解つてゐる。

何故か。

それは、其の一事で其の人の人柄がまだ出來て居ないと云ふのが、はつきりと私に解つて了つたからである。「心が出

來なければ歌は出來ない。

少しでも心の修業、特に此の道の修業が積んだ人なら、また少しでも繪心や音樂の事が解る人なら、夕焼の空に先づ心ひかれる。眞間の小川の薄明りに先づ心を引けられる。其の薄明りの中に川楊が揺れて居る。揺れる小枝に心も揺れる。揺れる小枝は燕の子が動かして居る。燕の子も動いて居る。啼いて居る、しがみついて居る。これだけでも生きた燕の生を感ずる事が出来る。小さな燕にも大自然の生が揺れに揺られて揺れてゐる。繪の方から見ても、黒と頬紅と、白と緑の葉と、撓んだ枝と水の色と夕焼と、これだけでも立派なものである。みんな動いて居る。様々に強く弱くゆ揺いでゐる。それに一羽

繪や秋ラスミナミコト

來、二羽來、空にも一羽留りもやらず翔けて居る。あはれは益、深く益、搖れるばかりである。觀た目から云つても、三羽すり寄つてしがみつゝ姿はいゝ。近よりかけて枝が搖れるのに驚く、燕の形も好い。其等の動きが愈、濃やかになるほど好い。と、燕の「心」其のものを深く觀て、其の「心」を自分の「心」とし、其の「生」を自分の「生」と同じに觀る、私達の突きつめた見方からも、それは立派な詩や歌其のものである。

それだけの事は、一寸見た瞬間に、凡てが自分の頭に這入つて來べき筈である。眼で見、耳で聽くだけはまだしも、靈全體ではつとを感じる位でなければ、歌や詩は出來ないものである。

ミタツシクイト
アス、クワレル
印々カマル

林學者。
林學博士。

其の人ははつと思つたが小石を投げた。
私はそれには何も云はなかつた。佛も縁無き衆生は度し難しと云はれた。
此の人の歌などは、見なくとも、私にはもうよく解つてゐた。(洗心雜話)

九 忙しいかな米國

上原敬 二

「時は金なり。」とは長いこと使ひ古した諺であるが、日本に居ては、こんなことは本當には解らぬ。といふのは、例へばアメリカで、或男が、午後七時から八時までの間、隔日に用が無くて困つてゐるとすると、其の旨を新聞に廣告し、これに適

當した仕事は無いかと求職する。又重寶なもので、世の中には、丁度此の人の空いてゐる時間だけ人が欲しいと思ふものがあつて、斯うして仕事が湧いて来る。一時間幾何で、目の前に時が金に替る。故に「時は金なり」とも云はれよう。

職工が工場へ通つても其の通りで、入口にはタイムレジスターが据ゑられ、時計の針の示す時間通りに銘々のカードに時間が記されるから、出勤した時間が正確にわかる。監督が朝から入口に出張つて、一々判を捺す様な時代遅れの事はやつて居ない。そして出勤時間が過ぎると、印刷が赤字で出来る。そのカードを一週間の終りに計算して、翌週月曜日に賃金を支拂ふ。遅刻は赤く出て居るから、何百人のカード

を調べた所で見逃しつこはない。遅れた時間だけ賃金を時間割で差引く。退出時間になれば、どんな忙しい時でも、會社と言はず、役所と云はず、工場と云はず、誰も歸ることについて一分も猶豫してはゐない。其の代り働くべき時間内は實に眞剣で、一所懸命である。それだから疲れなわけには行かない。日曜日は彼等にとつて眞に安息の日である。體裁や規則で日曜日があるのではなく、健康の必要上、疲勞の恢復上、無くてはならぬ休息日である。

故に日曜日に人の私宅を訪問して休養を妨げる人も無く、否、平日でも事務室で用を談じ、決して突然私宅を訪問して長座して邪魔をする人は無い。但し特に食事やお茶に招

かれた場合は別である。日本の造園家や都市計畫家が、公園は都市に於ける必須な要素であるといつてゐたとて、果して其の必要を躬ら痛切に感じた結果であらうか。アメリカに公園の發達してゐるのは、斯くの如く生活が忙しいのと獨身者の多いことに由るのである。

アメリカ人が無作法だと評されるのは故あることで、何分忙しいので、一々形式や禮儀に囚はれて居られない事情もあり、習慣もある。東歐諸國の群小國を旅行する際、一々其の國駐在の領事の許へ旅券の査證を頼みに行く時など、全く役所のだらしなさに呆れたことが度々ある。もう少し人間らしい待遇をして貰ひたいと思つたこともあつた。

アメリカでは忙しい爲の必要から、誰教へるともなく社會道徳が發達し、停車場の切符賣場でも、劇場の窓口でも、多勢の人が自然と一線に並び、順番の來るのを靜かに待つてゐる。人を追ひ越したり、傍の方から手を出したりする不届の者は稀である。たとひ、さういふ者が有つたとて、決して怒ることなく、寧ろ笑つて見送つてゐる。

都市の中心に在る郵便箱の上、又は足許には、箱に入りきらぬ小包類が、其のまゝむき出して山のやうに置かれてある。雨の少い國だから濡れる心配は無いが、又誰も持つて行くものも無い。此のやうな通信機關の盛に使用される國では、小さな小包は一々郵便局へは持つて行かず、此のポスト

に投込む。それを自動車で集めてまはる。全く人手が足りないので、銀行でも郵便局でも、金を數へるに一人の手でやる。萬一數へ違ひがあつたとて、此の損害は平素から多くの人を雇つて置く無駄な月給に比べれば、僅かなものである。小さな銀行には、一人しか行員が居ない處が少くない。斯様に人手の足りない上に忙しいので、アメリカの役所は英佛のそれのやうに、上官に會ふに一々秘書官や諸役人の手を煩はさないで済むやうに出來てゐる。それは官廳の入口に案内板が掲げられ、局課名氏名室の番號が書かれてあるので、誰でも會ひたい人には、昇降機で其の階に上り、其の番號の室を叩いて這入れば、何課であらうが、

市長室であらうが、思ふ處に這入つて誰にでもすぐ會へる。その代り少し忙しい役人になると千客萬來である。それ故皆用談はさつさと切上げて要領よく話すので、大方五分か十分で一人分は済む。時候の挨拶だの世間話だのは大禁物である。

アメリカの役人は至極腰が低く、容態ぶらない。それはアメリカの役人は、職を罷めれば何時でも市井の一市民として商賣に従事する國民であるからであらう。そして又如何なる商賣をしようと、人は何ともいはぬ所が腹の大きい國民である。聞いた話ではあるが、キャリフォルニア州の或警察署長は、罷めてから石油運搬人になり、自動車を操縦して

神聖ト云フ、
ワラレルモノ
生ルナカラニシテ徳ヲ
道徳ヲオカスフトノモ
ナインノ
現(考へず)

ある。サクラメント市長はウエスタンホテルの客引になり、
ホノル、の市長は汽船會社の切符賣となり、私が現に會つ
たアスキス氏も市長を辭した後は煙突屋の親父でをさま
つてゐる。これは何も零落でもなければ落魄でも無い。自分
の思ふ儘をやつてゐるので、世間の人は尋常茶飯事と心得
てゐる。其の前身はどうであらうとも構はぬ。それだけ職業
は神聖視されてゐる。
殊に格式振らないことで著しいのは醫者である。ビルデ
ングの二階の二室を借込み、待合室に一脚の椅子、診察室に
ベッドと腰掛とを置くだけ、此處では診察するだけで、容體
のむつかしいのは病院を教へて入院させる。そして其の病

文學者。
文學博士。
新聞記者。
大正五年歿
す。
名は金之助。

院へ此の醫者が通つて治療をするのである。普通は處方箋
を與へて診察料を貰ふだけのことで、藥局の書生も不必要
なら看護婦も要らぬ。醫藥分業である。
とにかくアメリカといふ國は、凡て忙しいことから割り
出して事が行はれる國である。(わたり鳥の記)

一〇 山路の雲雀

夏目漱石

立上る時に向うを見ると、路から左の方に、バケツを伏せ
た様な峯が聳えてゐる。杉か檜か判らないが、根元から頂ま
で悉く蒼黒い中に、山櫻が薄赤くだんだらに棚引いて、繼目
が確と見えぬ位に靄が濃い。少し手前に、禿山が一つ群を擡

赤い毛布
赤い毛布を著
た地方人を云
つたのである。



夏目漱石

んで眉に逼る。禿げた側面は、巨人の斧で削り去つたのか、
鋭い平面をやけに谷の底に埋めてゐる。天邊に一本見える
のは赤松だらう。枝の間の空さへ判然してゐる。行手は二町
程で切れてゐるが、高い處か
ら赤い毛布が動いて來るの
を見ると、登ればあすこへ出
るのだらう。路は頗る難儀だ。
土をならすだけなら、左程
手間も入るまいが、土の中には大きな石がある。土は平にし
ても、石は平にならぬ。石は砕いても、巖は始末がつかぬ。掘り
崩した土の上に悠然と峙ち、吾等の爲に道を讓る様子はな



い。向うが承知しなければ、乗り越すか廻はらなければなら
ん。巖のない處でさへ歩きよくはない。左右が高くなつて、中
心が窪んで、まるで一間幅を三角に穿つて、其の頂點が眞中
を貫いてゐると評してもよい。路を行くと云はうより、川底
を涉るといふ方が適當だ。元より急ぐ旅ではないから、ぶら
ぶらと七曲にかゝる。
忽ち足下で雲雀の聲がした。谷を見下したが、何處で鳴い
てゐるか、影も形も見えぬ。只聲だけが明かに聞える。せつせ
と忙しく絶間なく鳴いてゐる。方幾里の空氣が、一面に蚤に
刺されてゐたいまらないやうな氣がする。あの鳥の鳴く音
には、瞬時の餘裕もない。

長閑な春の日を鳴盡くし鳴明かし、又鳴盡くさなければ
 氣が濟まんと見える。其の上何處までも登つて行く。何時ま
 でも登つて行く。雲雀は屹度雲の中で死ぬに間違ひない。登
 り詰めた揚句は、流れて雲に入つて漂うて居る中に、形は消
 えてなくなつて、只聲だけが空の裡に残るのかも知れない。
 巖角は鋭く廻はつて、按摩なら眞逆様に落ちる所を、際どく
 右へ切れて、横に見下すと、菜の花が一面に見える。雲雀はあ
 すこへ落ちるのかと思つた。次には、落ちる雲雀と上る雲雀
 とがすれ違ふのかと思つた。最後に、落ちる時にも上る時に
 も、又すれ違ふ時にも、元氣よく鳴き續けるだらうと思つた。
 春は眠くなる。猫は鼠を捕る事を忘れ、人間は借金のある

事を忘れる。時には自分の魂の居處さへ忘れて正體がなく
 なる。たゞ菜の花を遠く望んだ時に眼が醒める。雲雀の聲を
 聞いた時に魂のありかが判然する。雲雀の鳴くのは口で鳴
 くのではない、魂全體で鳴くのだ。魂の活動が聲に現れたも
 のの中で、あれほど元氣のあるものはない。あゝ愉快だ。斯う
 思つて斯う愉快になるのが詩である。(草枕)

一一 山吹の花

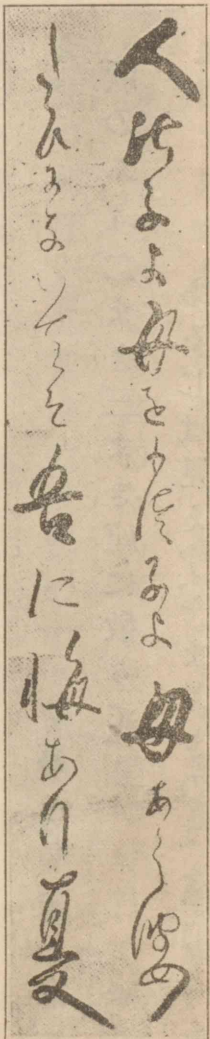
落合直文

歌のふみ二まき三まき座に散りて、

あるじは見えず、やまぶきのはな。
咲き乱る中

筆蹟

人の子よ母を
もつ子よ母あ
らはたひにな
いてそ吾に悔
あり 直文



蹟筆文直合落

歌人。

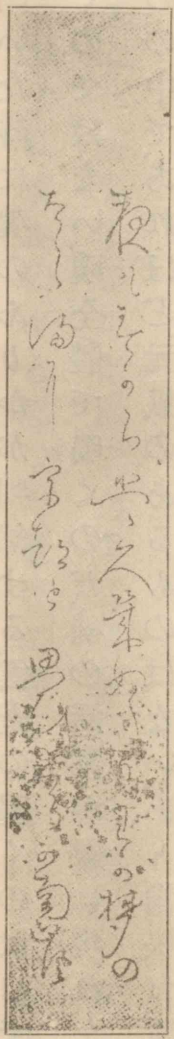
男爵。

御歌所長。
明治四十五
年薨す。

高崎 正風

筆蹟

「夜もすから
ひくきぬた
をわか夢のた
えまにうつと
思ひけるか
な」正風



蹟筆風正崎高

小出 燦

歌人。
御歌所主事。
明治四十一年
歿す。

あまりにも瑕あらせじと思ふより、

歌人。

文學博士。
竹柏園と號
す。

ちひさくなりぬあたら真たまは、
佐々木 信綱

瀧をおほふ瑞枝木立をもる、日に
ぬれ羽ひかりて鶴鶴飛ぶも。

尾上 柴舟

ちさき火も投ぐる光ははるかなり、

破らでおかんなわが歌の反古。
菊池 寛

一二 形

攝津半國の主であつた松山新介の侍大將中村新兵衛は、
五畿内・中國に聞えた大豪の士であつた。

侍大將
武家て侍を總
統する者。

文學者。
新聞記者。

形はわのたのこつてのもの

一二 形

六三

筒井松永
大和
荒木和田
攝津
別所
播磨

猩々緋
極めて濃いあ
ざやかな紅色

その頃、畿内を分領して居た筒井松永、荒木和田、別所など大名・小名の手の者で、「槍中村」を知らぬ者は、恐らく一人もなかつただらう。それほど、新兵衛はその扱き出す三間柄の大身槍の鋒先で、魁殿の功名を重ねて居た。その上、彼の武者姿は、戦場に於て水際立つ華やかさを示して居た。火のやうな猩々緋の羽織を着た彼の姿は、敵味方の間に、輝くばかりのけざやかさを持つて居た。

「あゝ、猩々緋よ。」と、敵の雑兵は新兵衛の槍先を避けた。味方が崩れ立つた時、激浪の中に立つ巖のやうに敵勢を支へて居る猩々緋の姿は、どれ程味方にとつて頼もしいものであつたか分らなかつた。又嵐のやうに敵陣に殺到するとき、そ

の先頭に輝いて居る猩々緋の羽織は、敵にとつてどれほどの脅威であるか判らなかつた。

かうして槍中村の猩々緋は、戦場の華であり、敵に對する脅威であり、味方にとつては信賴の的であつた。

「新兵衛どの、折入つてお願がある」と、元服してからまだ間もないらしい若い士は、新兵衛の前に手を突いた。

「何事ぢや、そなたとわれらの間に左様な辭儀は入らぬぞ。望と云ふを、はやう云うて見よ。」と、ハカクワケテヤル 育むやうな慈顔を以て、新兵衛は相手を見た。
（豆ふかりカの、おれものに對しては）

その若い士は、新兵衛の主君松山新介の子であつた。そして、幼少の頃から新兵衛が守役として、我が子のやうに慈み

育てて来たのであつた。

「外の事でもをりない。明日はわれら初陣ぢやほどに、何ぞ華々しい手柄をして見たい。ついでには、御身様の猩々緋を貸してたもらぬか。あの羽織を着て、敵の眼を駭かして見たら御座る。」

「はゝゝゝ、念もない事ぢや。新兵衛は高らかに笑つた。新兵衛は、相手の子供らしい無邪氣な功名心を快く受入れることが出来た。

「が、申して置く。あの羽織は、申さば中村新兵衛の形ぢやは。そなたが、あの羽織を身に着ける上からは、われほどの肝魂を持たいで叶はぬことぞ。」と云ひながら、新兵衛は又高ら

助詞

かに笑つた。

そのあくる日、攝津平原の一角で、松山勢は大和の筒井順慶の兵と鏑を削つた。戦が始る前、何時ものやうに猩々緋の武者が、敵勢を尻目にかけて、大きく輪乗をしたかと思ふと、駒の頭を立てなほして、一氣に敵陣に乗入つた。

吹分けられるやうに敵陣の一角が亂れた所を、猩々緋の武者は槍を付けたかと思ふと、早くも三四人の端武者を突伏せて、又悠々と味方の陣へ引きかへした。

その日に限つて、黒革緋の鎧を着て、南蠻鐵の兜を被つて居た中村新兵衛は、會心の微笑を含みながら、猩々緋の武者の華々しい武者振を眺めて居た。そして自分の形だけです

らこれほどの力を持つて居ると云ふことに、可なり大きい誇を感じて居た。

彼は二番槍は自分が合はさうと思つたので、駒を乗り出すと一文字に敵陣に殺到した。

猩々緋の武者の前には、戦はずして浮足立つた敵陣が、中村新兵衛の前には、びくともしなかつた。その上、彼等は猩々緋の「槍中村」に突き擾された恨を、此の黒革緘の武者の上に復讐せんとして、猛り立つて居た。

新兵衛は、何時もとは勝手が違つて居ることに氣が付いた。何時もは虎に向かつて居る羊のやうな怖氣が敵に在つた。彼等がうろたへ血迷ふところを突伏せるのに、何の造作

あまのうろ

もなかつた。今日は、彼等は對等の戦をする時のやうに、勇み立つて居た。どの雑兵もどの雑兵も、十二分の力を新兵衛に對して發揮した。二三人突伏せることさへ容易でなかつた。敵の槍の鋒先が、ともすれば身をかすつた。

新兵衛は必死の力を振つた。平素の二倍の力をさへ振つた。が、彼は兎もすれば打負けさうになつた。手輕に猩々緋を貸したことを後悔するやうな感じが、頭の中をかすめた時であつた。敵の突き出した槍が、緘の裏をかい、彼の脾腹を貫いて居た。(極樂)

歌人。
名は繁。

一三 山 寺

若 山 牧 水

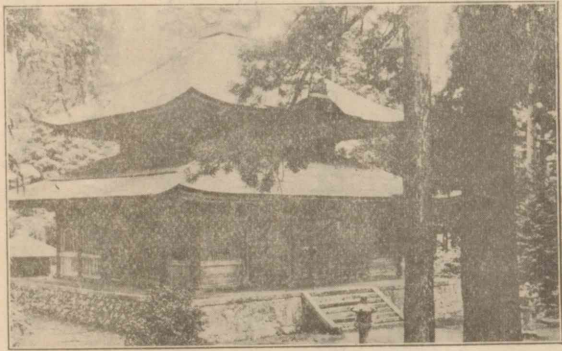
眼が覺めて見ると、雨戸の隙間が明るくなつてゐる。雨はと思ふと何の音もせぬ。もう寺の爺さんも起きた頃だと、勝手元の方に耳を澄ましても、何の音もせぬ。暫くすると、朗かに啼く鳥の聲が耳に入つて來た。何とまあ、鳥の種類が多いことだらう。あれかこれかと、心あたりの鳥の名を思ひ出して見ても、とても數へ切れぬほどの種々の音色が、枕の上に落ちて來る。私は耐へきれなくなつて飛起きた、そして雨戸を引きあげた。

照るともなく、曇るともなく、燻り渡つた一面の光である。見上げる杉の木立は、次から次と唯靜かに押竝んで、見渡す限り、微かな風の氣勢もない。それからそれと眼を移してゐる。

た私は、ふと、杉の木立の間に、遙かに光る處を見出した。麓の琵琶湖である。何處から何處までと、その周圍は解らないが、

兎に角朦朧とその水面の一部が輝いてゐる。

餘りに靜かな眺なので、我を忘れて、ぼんやりと其處らを見廻はしてゐると、又一つ目に入つたものがある。眼前からすぐ落込んでゐる窪地の一帶は、丁度溪間せきまの様になつて、僅かの間杉木立がとだえて、細長い雜木林となつてゐるが、其の藪の中を、のそり／＼と半身を屈めながら、何か



比叡山戒壇院

能
早
口
ウ

探してゐる人が居るのである。顔を丸々と剃つた大男の、紛ふ方なき寺男の聾爺さんである。それを見ると、妙に私は嬉しくなつて大聲に呼びかけたが、無論、彼は振向かうともしなかつた。後庭に降りて、簞の前で顔を洗つて居ると、爺さんは青々とした野生の獨活を拵げて歸つて來た。こんなものも、といひながら、筍をも二三本取り出して見せた。

この寺は比叡山の山中に残つてゐる十六七の古寺のうちでも、奥に在つて、また最も廢れた寺であつた。住持もあるにはあるが、麓の寺とかけ持で、何か事のあるときのほか、滅多には登つて來ず、年中殆ど、この寺男の爺さんが一人で留守居をして居るのである。四方たゞ杉の林があるのみで、し

傳教大師
最澄。

かも溪間の行きどまりになつた處にあるために、誰も立寄る者もなく、まる一週間滞在してゐる間、私はこの金聾の爺さんのほか、人間の顔といふものを餘り見ることはなくて過してしまつた。

多いのは唯鳥の聲である。大正十年が當山開祖傳教大師の一千一百年忌に當るといふ舊い山、そして五里四方に互ると稱へられる廣い森林、その到る處が殆ど鳥の聲で満ちて居る。

朝最も早く啼くのが郭公である。くわつくわう、くわつくわう。と啼く。鋭くして澄み、而もその間に何とも云ひ難い寂びを持つたこの聲が、山や溪の冷たい肌を刺す様にして響

くわつくわう
くわつくわう
くわつくわう
くわつくわう

き渡るのは、大抵午前の四時前後である。この鳥の啼く時、山はまつたく鳴りを沈めてゐる。くわつと鋭く高く、さうして直ちに「くわう」と引くその聲が、ほゞ二つか三つ、或場處で續けざまに起つたかと思ふと、もうその次は異なつた或頂上か、溪の深みに移つて居る。暫くも同じ處に留つてゐない。そして殆どその姿を人に見せた事がない。

杜鵑も朝が多い。之は必ず最も高い梢でなくては啼かぬ。この鳥も二聲か三聲しか聲を續けぬが、どうかすると、取り亂して啼きたてる事がある。その時は、例の「本尊かけたか」の律も破れて、全く急迫した亂調となつて来る。日のよく照る朝などは、聽いてゐて息苦しくなるのを感じる。この鳥は、聲

よりも、峯から峯、梢から梢に飛渡る時の姿が誠に好い。それから、高調子の聲に混つて、何といふ小鳥だか、大きさは燕ほどで、その尾の一尺位長いのがゐて、細々と、實に細々と息を切らずに啼いてゐるのがある。これは下枝から下枝を渡つて飛んでゐる。

日が闌けて、木深い溪が日の光に煙つた様に見える時、何處から起つて来るのだから、大きな筒から限もなく抜け出して来る様な聲で啼立てる鳥が居る。始もなく終も無い。聽いて居れば、次第に魂を吸ひとられて行く様に、寄る邊ない聲の鳥である。或時は極めて間遠に、或時は釣瓶打に烈しく啼く。この鳥も容易に姿を見せぬ。聲に引かれて、どうかして一

トモヨク
一ツク
一ツク

ホトトギス
ツルク
ツルク
ツルク

目見たいものと、幾度も私は木の平に濡れながら林深く分
入つたが、終に見る事が出来なかつた。筒鳥といふのがこれ
である。筒鳥の聲は、極めて圖抜けた、間の抜けたものである
が、それを稍小さくしたものに呼子鳥といふのが居る。初め
筒鳥の子鳥が啼いてゐるかとも思つたが、よく聞けば全く
異なつてゐる。山鳩にも似、また梟にも近いが、そのいづれと
も違つた、やはり呼子鳥としての言ひ難い寂びを帯びた聲
である。

數へれば際限が無い。晴れた朝など、これらの鳥が殆ど一
齊に、其處此處の溪から峯にかけて鳴きたてる。茫然と佇ん
で耳を澄ます私は、私の身體の痛み出す様な感覺に襲はれ

る事が再々あつた。(比叡と熊野)

一四 信濃路

正岡子規

俳人。
明治三十五
年歿す。
名は常規。
上野
東京の停車場。
横川
群馬縣にある
停車場。碓氷
峠の入口。
碓氷峠
群馬縣に屬し、
長野縣の界に
ある高地。

上野より汽車にて横川に行き、馬車にて碓氷峠を越ゆ。鳥
の聲耳もとに落ちて、見上ぐれば千仞の絶壁、百尺の老樹、聳
え聳えて天も高からず。樵夫の唄、足もとに起つて、見おろせ
ば、^{わが}葛かつらを傳ひて渡るべき谷間に、腥き風さつと吹きど
よめきて、^{山の}萬山自ら震動す。遙かに來し方を見かへるに、山又
山、^{山の}峨々として、路いづくにかある。寸馬豆人といへるは、かれ
かとばかり疑はれて、^{いづらに}つゞら折、幾重の峯をわたりきて、

丈山尺樹
寸馬豆人

雲間にひくき山もとの里。



日もやゝ暮れかゝれば、四方濛々として、山とも知らず、海とも知らず、かけ上る駒の蹄に、踏散らす雲霧のあはひを見れば、一步の外は、削りたてたる峻崖の底もかすかにて、いとおそろし。登れども登れども窮る處を知らず。山ますま

す高く、雲いよゝ低し。

見あぐれば、信濃につゞく若葉かな。

輕井澤はさすがに夏なほ寒く、隙間漏る淺間おろしに、一

輕井澤
長野縣北佐久郡にあり。

重の旅衣、見果てぬ夢を護るに難かり。例ならず疾く起きいでて窓を開けば、幾重の山嶺屏風を繞らして、草のみ生ひ茂りたれば、其の色、染めたらんよりも麗し。

山々は萌黄、淺黄や、ほとゝぎす。

淺間は雲に隠れて、煙もいづこにたち迷ふらんと思はる。汽車を驅りて、善光寺に詣で、また川中島を過ぎて、篠井までたち戻る。古戦場はいづくのほどとも知らねど、山と山とに圍まれて、犀川の廻ぐるあたりにやあらん。河の水はいたく瘦せて、ほとりの麥畠空しく赤らみたり。

日はくれぬ。雨はふりきぬ。旅衣、

袂かたしき、いづくにか寝む。

淺間
長野縣北佐久郡と、群馬縣吾妻郡とに跨る噴火山。
善光寺
長野市内にある寺。
川中島
長野縣更級郡にあり。甲越古戦場。
篠井
同縣更級郡にある町。

馬場峠
長野縣更級郡
八幡村の西の
峠

次の日雨晴る。路に立てる芭蕉塚に興を催して辿り行けば、行くて遙かに山重れり。野の狭う尖りて、次第々々に入る山路ははしく、弱足にのぼる馬場峠、さても苦しやと休む足もとに、誰が栽多しか、珊瑚なす覆盆子、旅人も採らねばや、こぼるゝばかりなり。少し上りて、とある樹蔭の葎簀茶屋に憩へば、主婦のもてなしぶり、谷水を四五町の麓に汲みてもてくる汗の滴り、情を汲む一口に浮世の腸は洗はれたり。一樹のかげ、一河のながれとや、ひじりの教も時にあうてこそ有りがたけれ。

此の夜は亂橋といふ怪しの小村に足をとゞむ。隣室の雑談に夢覺されて、つとめてこゝをたち出づれば、はや爪先あ

松本
同縣東筑摩郡
にある町。

がりの立峠、旅の若衆と見て取つて、馬子が馬に乗れとの勧めありがたや、乗りて見れば、旅ほど氣樂なるものはなし。昨日の馬場峠は、なにとて苦しみしか。路の邊に咲く白き花を、何ぞと問へば、これなん卯つ木と申す。といふいと嬉しくて、むら消えし山の白雪來て見れば、

駒のあがきにゆらぐ卯の花。

鶯や、野を見おるせば早苗取。

松本にて晝餉したゝむ。早く木曾路に入らんことのみ急がれて、原新田まで三里の道を馬車にちゝめて、洗馬まで辿りつき、饅頭にすぎ腹をこやして、本山の玉木屋に宿る。

木曾 長野縣西筑摩郡にある地方。
洗馬・本山・櫻澤 同縣東筑摩郡にあり。
奈良井・鳥居峠 同縣西筑摩郡にあり。

本山を出で櫻澤を過ぐれば、こゝぞ木曾の山入り。山のけしき、水の有様は、や尋常ならぬ粧にうつゝ、をぬかし、桃源遠からずと獨り勇めば、鳥の聲も耳に立ちて珍し。

奈良井の茶屋に息ひて、茱萸はなきか。と問へば、茱萸といふものは知り侍らず。珊瑚實ならば背戸にあり。といふ。山中に珊瑚、さてもいぶかしと裏に廻れば、やはり茱萸なり。主人の女房、親切に採りてくれたり。峽中第一の難處といふ鳥居峠は、若葉の風に夢を薫らせて、瘦馬の力に面白う攀ぢのぼる。

馬の背や、風吹きこぼす椎の花。

頂にて馬を下り、つくづく四方を見おろせば、古木鬱蒼、谷

蘧原 同縣西筑摩郡にあり。

宮の越 同縣同郡にあり。今は日義村といふ。

旭將軍 木曾義仲。

深くして、樵夫の小徑微かに隱見す。珍しく晴れわたりたる空の青嵐を踏まへながら山を下れば、蘧原の驛なり。或家たち寄りてお六櫛を求む。このほとりよりぞ木曾川に沿うて下るなる。白雲をあやどる山脈はいよ／＼逼りて、かぶせかゝらん勢怖しく、奥山の雪を解かして清らかなる水は、谷を縫うて、その響凄じ。深き淵のたゞ中に、大いなる岩の一つ突きいでたる上に、年ふりたる松の枝おもしろく、龍にやあらんと思はれたるもをかし。宮の越の村はづれに千みて待つこと半時、いと古代めきたる翁の釣竿を擔ぎたるが、畫の中よりぞあらはれ出でたる。笠をぬぎて懇慫に德音寺の道を問ふ。翁のいふ、さてもやさしの若者や。旭將軍のなき跡を

木曾宣公
義仲
福島
長野縣西筑摩
郡にあり。

弔はんとてや、こゝまでは來給へる。こゝに茂れる夏木立は
八幡の御社なり。かしこの山の上こそ昔の城の址なれ。この
わたりの畑も、つはものどもの住みし夢の名残なるものを、
今は桑の木ばかりぞ秀でたる。と、一つくゝに指さす。そゝる
に古を偲ぶ言葉のはし、この翁、謠ならば、かき消すやうにう
せぬべし。日照山德音寺に行きて、木曾宣公の碑の右摺一枚
を求む。この前の淵を山吹が淵、巴が淵と名づくとかや。福島
をこよひの旅枕と定む。木曾第一の繁昌なりとぞ。

翌日、朝大雨。待てども晴間なし。傘を購ひ來りて、書き流す
句に、

折からの木曾のたびぢを五月雨。

カウロシ
東山時代

旅亭を出づれば、雨小やみになりぬ。このひまにと急げば、雨
の脚に追ひつかれ、木蔭に憩へば、又降りやむ。とにかくと雨
になぶられながら、行きくゝて棧に着きたり。見る目危き兩
岸の岩は、數十丈の高さに削りなしたるさま、一雙の屏風を
押立てたるがごとし。神代の昔より蒸し重りたる苔の、美し
う青み渡れるあはひに、何げなく咲きいでたる杜鵑花
の麗しさ、狩野派の畫にやあらん、土佐畫にやあらん。下を覗
けば、五月雨に水嵩増したる川の勢、渦まく波に雲を流して、
突きてはわれ、當りては碎くる響、大磐石も動く心地して、う
しろの茶屋に入り、床几に腰打ちかけて目を瞑ぐに、大地の
動き、しばしはやまず。蕉翁の石碑を拜みて、さゝやかなる橋

の虹の如き上を渡るに、わが身も空中に浮かぶかと疑はれ、
 足の裏ひやくくと覺えて、強くもえ踏まず。通り來りし方を
 見渡せば、こゝぞ棧のあととおぼしきも、今は石を積固めた
 れば、固より往來の煩もなく、只薦かづらの力がましくはひ
 纏はれるばかりぞ古の倂なるべき。

むかしたれ、雲の往來の跡つけて、

わたしそめけん、木曾のかけはし。

上松を過ぐれば、程もなく寢覺の里なり。寺に到りて案内を
 乞へば、小僧絶壁のきりぎはに立ち、遙かの上を指ざして、こ
 こは浦島太郎が龍宮より歸りて後に、釣を垂れし跡なり。川
 のたゞ中に松の生ひたる大岩を寢覺の床岩、その上の祠を

上松
長野縣西筑摩
郡にあり。

浦島堂とは申すなり。その傍に押したたてたる岩を屏風岩、疊
 み上げたるを疊岩といふ。象岩はその鼻長く、獅子岩はその



寢覺の床

口廣し。この外、こしかけ岩、狙
 岩、釜岩、硯岩、烏帽子岩など申
 すなり。いと殊勝氣にぞし
 やべりける。誠や、こゝは天然
 の庭園にて、松青く、水清く、い
 づこの工匠か削り成しけん。

岩石は峨々として高く、低く水に臨み、凹めるところは渦を
 なし、逼れるところは瀧をなす。いかさま仙人の住處とも覺
 えてたふとし。(瀬祭書屋俳話)

筆蹟
「人々の御ち
さう御い光の
ほどみやうが
おそろしく存
候かしこ。
二十七日、か
すが、さかむ
さぬき殿人々
申給へ」

らして、悪戯はし
ながら行儀がよ
いぞ。」と、鼻うごめ
かせば、深い山に
は猪鹿の種が盡
きぬに、痩せても
枯れても、京の歴々の果ぢやとなら
ば、金の茶釜の一つ二つはあらうも
知れぬ。」と、何心なき里人の風説を、い
かにしてか野伏山賊どもの聞知り
たりけん、さらば彼の家には金銀もあるべく、財寶も多かる



春日局の筆蹟

べし。よき隙あらば忍び入りて、我等が榮耀の資本にせん。」と、
竊かに語らひつゝ、窺ひ居たりとは、神ならぬ身の、固より夢
にも知るよしぞなき。

主人稻葉正成、ふと苟且の感冒の心地して、打臥したるが、
思の外に病勢募りて、いといたう勞れ果てたり。さらでだに
かひく、しくまめやかなる福女は、良人の病に罹りけるよ
り、日夜帯をも解かでの看病、すこしも怠なかりけるが、其の
誠心や通じたりけん、今宵は、熱も稍低うなりしと覺えて、心
地もさまで苦しからず。御身は晝夜手一つの看病に、さこそ
は疲れ候ひつらめ。暫しが程だにまどろみて、身體を勞り候
へ。」と、情ある良人の言葉、むげに否まば、なかくに病の爲に

悪しかり（助動）な（し）んと思ひければ、快く、さらば、暫しが程御免たまはれ。とて、久々にて己が臥床に入りたれど、病める良人が事、稚兒の上、生憎に心にかゝりて、夜は更けぬれど、眼も合はず。折しも、さ（よ）ゆる嵐（体）につれて遠寺の鐘の聞ゆるを、算ふともなく數ふれば、草木も眠る丑三つなりけり。傍を見れば、頑是なき稚兒の寐顔に笑を含めるは、如何なる夢路をか辿るらん、さてもかゝる僻陬に人となりなば、いつ成り出づる期かあらんなど、又しても、來し方、行く末の事など思ひ出でられて、眼はいよゝゝ、冴えまさり、思はずも太き息のみつかるゝを、病める良人に悟られじと、強ひて小夜衣引被きて、睡れる様を装はんとさせる折しも、枕邊の雨戸ぐわらりとひき開け

明智殿
日向守光秀

て、忽ちはらくと足音（を）せさせ、はや眼の前にたち現れたる四人の黒き人影は、問はでも著（き）き曲者（な）なり。餘りの意外に、驚きて跳起きたる福女、何者ぞ。と聲かくれば、問はるゝ迄もなし。夜陰の稼（を）をなす者なり。今宵夜更けて音づれたるも、此の家（に）に蓄へたる金銀財寶のあらん限を申し受けんとてなれば、命惜しくば、残らず出してわれ等に捧げよ。否まば病みほ（り）うけたる此の家（の）の主人より血祭せん。と、簀子（を）荒らかに踏鳴らして息まきかゝるに、福女は露ばかりも慌（て）て騒げる氣色なく、さる儀ならば無用なり。主人の病めるを覘（ひ）て、女と侮り入りこみし野伏（の）のしれものども、そも我を誰とか思へる。明智殿の御内に、鬼と呼ばれし齋藤内藏助利三が息女、今は

稻葉佐渡守正成の室と知らざるこそ愚かなれ。汝等如き盜賊に、塵一つだに取らすべきかは。無禮の舉動、そこ動くな。といひも終らず、床に懸けたる紀正恆が鍛へに鍛へし業物の大太刀おつとり、矢庭に二人を斬つて捨て、尙も漏さじと斬りたつるに、残れる二人は慌て惑うて、逸足出して逃走るを、福女は追うて庭にまで出でたりしかど、如法の闇夜に、何方さして逃失せけん、蹤追ひかけん術なきのみか、病める人の上、稚兒の上は、たいたくも心にかゝれば、さまではとて取つて返しぬ。このこと、誰いふとなく噂に上りて、さては心ざまの雄々しく、賢しきのみにはあらで、武藝また世の人に勝れておはしけり。かへすと、いみじき女性よ。とて、人々語り

継ぎければ、盜賊ども聞怖おして、その後は隙を窺ふこともあらずなりぬ。

福女とは誰ぞ。讀む人ははや推せるならん。こはこれ、婦女の鑑と世に知られし、徳川三代將軍家光の乳母春日局その人なりけり。(春日局)

一六 をさな子 小林 一茶

こぞの夏、竹植うる日のころ、うき節しげき浮世に生まれたる娘、ものにさとかれと名を、さととよぶ。ことし誕生日祝ふころ、ほひになり、手うち手うち、あはは、天窓てんてん、かぶりかぶりふりながら、おなじき子ども、の風車といふものも

信濃國柏原の俳人の俳人。文政十一年歿す、年六十五。竹植うる日。陰曆五月三日の稱。

てるを、しきりにほしがりてむづかれば、とみにとらせけるに、やがてむしや／＼しやぶつて捨て、露ほど執念なく、直ち



茶 一 林 小

に外の物に心うつりて、そこらにある茶碗を打破りつゝ、それ
もたゞちに倦みて、障子のうす紙をめぐ／＼むしるに、よくし
たよくしたとほむれば、誠と思
ひ、けらくと笑ひて、ひたむし
りにむしりぬ。心のうち一點の塵もなく、名月のきら／＼し
く清く見ゆれば、なかく／＼に心の皺も伸しぬ。

又、人の來りて、わん／＼はどこに。といへば、犬に指さし、か

あかあは、と問へば、鳥に指さすさま、口もとより爪先まで、愛敬こぼれてあいらしく、春の初草に胡蝶の戯るゝよりもやさしく覺ゆ。

折から門に月さしていと美しく、外にわらべの踊の聲のすれば、たゞちに物投げすて、片ゐざりにゐざり出でて、足をあげ手眞似してうれしげなるを見るにつけ、いつしか、かれをも振分髪（あそびかみ）のたけになして、をどらせたらんには、二十五菩薩の管絃（つげん）よりも、はるかにまさりて興あるわざならんと、我が身につもる老を忘れて、憂さをなん晴しける。

かく日すがらを（ひすがら）をじかの角のつかの間も、手足を動かさずといふことなく、遊びつかれる（つかれる）ばにや、朝は日のたくるま

で眠る。そのうちばかり、母は飯炊ぎ、そこら掃きかたづけ、
 やがて闇に泣聲のするを、目の覺むる相圖と定め、手かして
 くもいだき起して、乳房あてがへば、すはくと吸ひながら、
 胸板のあたりをうちたゝきて、にこ／＼笑ひ顔をつくるに、
 母の長き胎内のくるしみも、日々の襤褸のけがらはしきも、
 打忘れて、手のうちの玉となでさすりて、一人喜ぶなりけり。
 蚤のあとかぞへながらに添乳かな。

(一茶全集)

こりまの終止の場
は感動とよ

悔樂住也

一七一茶

人の喜怒哀樂の奥底には、何時も量り知られぬ寂しさの
 淵が湛へられてゐる。悲も恨も其の奥をきはめれば、唯一條

芭蕉
伊賀の人。
俳人。

の寂しさのみが残る。憂き我を寂しからせよ閑古鳥。と芭蕉
 は言つた。憂き中にはまだあらゆる人の世の煩惱がある。寂
 しさの中には喜も悲も恨も怒もない。善無く悪無き境であ
 るから、人を裁く心も無い。其等を遙かに超越した、其等の共
 に溶合つた、静かな澄切つた心の境地である。自然は寂しく、
 人の世も寂しい。其の寂しさをよく噛みしめ、其の寂しさと
 一つになつた時、始めて心の安らかさが得られる。

一茶の一生は寂しかつた。一茶は又寂しさを愛した。寂し
 さを知る者は本當の人の世の姿が目に映る。自然と一つ心
 になれる。繼子の一茶が晩年此の境地に到達した時、もう一
 茶の心には、人に對する恨も怒も無かつた。かつて、故郷は蠅

「撫子や、まゝは、いきゞの日蔭花。」と言つた様なひがみも、又「俺と来て遊べや、親の無い雀。」と言つた様なへだて心も無かつた。

人さした蛇のまじく蓮のうへ。

雀の子、其處退けくお馬が通る。

すゝ捨てん、其處退きたまへ、御雀。

田の草や、投付けられた處に咲く。

ゆきとけて、村一ぱいの子供かな。

其處には唯總てのものをいとほしむ愛のみがあつた。

花のかげ、赤の他人は無かりけり。

會合常離

此のやうな末世を、櫻だらけかな。

一茶は又穢土に美しさを見出して居た。打算的な醜い此の世の中にひそんで居る美しさを認め得た人である。一茶は決して厭世的詩人では無かつた。

露の世は、露の世ながらさりながら。

一茶は此の世の露の世である事を知つて居た。さうして其の露の世を懐かしみ、露の世のあらゆるものに人間らしい執着を持つて居た。會つた者は必ず離れる。それが露の世の定めである。縁あつて妻となり、子となつても、遂には別れねばならぬが、

秋風や、むしりのこしの赤い花。

幼くて死んだ我が子を思ふ時、やはりあきらめきれぬ悲の涙があつた。

名月を取つてくれると、泣く子哉。

蚤のあと數へながらに、添乳かな。

露のたま、つまんでみたる童かな。

たのもしや、つんつるてんの初給。

其のかはい、我が子を喪つたのである。露の世ながらさりながら。である。此處に寂しさがある。寂しさを知つて始めて本當の信仰が得られる。一茶は熱心な他力信者であつた。總てを阿彌陀様の御心に任せて居た。

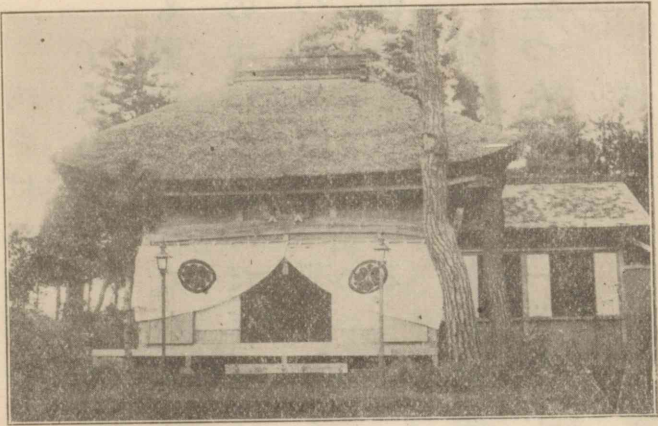
兎も角もあなた任せの年のくれ。

會者佛離

たゞ頼め花もはらく、あの通り

梢を離れる一片の花びらも、彌

陀の大慈大悲の御心の外に漏れてはゐない。百萬石も笹の露。富もいらぬ、名もいらぬ、唯頼め。である。念佛を唱へて地獄に落ちるならば、喜んで落ちよう。彌陀の本願を信じて居た一茶の心は安らかであつた。一茶は總てのものを素直に見、素直に受入れるやうになつ



た。

旨さうな雪がふうわりふうわりと。
 あさばれに、ばち／＼炭の機嫌かな。
 子供の様を無邪氣さと素直さがある。一茶は宗教も哲學も藝術も説かなかつた。其等總てを、巷の言葉で、僅か十七字の中に盛込んだだけであつた。一茶はどこまでも俗人であつた。其處に一茶に對する、なんとも言はれぬ人間味があり、懐かしみがある。
 私は、苦惱漂泊の後、悠々晩年を雪深い信濃路柏原の里に送つた、寂しい一茶を本當に懐かしく思ふ。

一八 女流の俳句

園女 伊勢の松阪の人。芭蕉の門下。享保十一年歿す、年六十三。
 智月 近江の天津の人。芭蕉の門下。歿年不詳。
 捨女 丹波の人。北村季吟の門下。元禄十一年歿す、年六十五。
 秋色 江戸の人。其角の門下。享保十年歿す。
 花讚 古川氏、名は松。文政十三年歿す、年二十三。

香 忙しや、すみれを摘めば土筆。園女
 春 鼻紙のあひだに萎むすみれかな。同
 夏 衣がへ、みづから織らぬ罪ふかし。同
 負 負うた子に髪なぶらるゝ暑さ哉。同
 春 鶯に手もとやすめん、ながしもと。智月
 秋 朝顔の咲くや、親にもしかられず。同
 冬 雪のあさ、二の字／＼の下駄の跡。捨女
 春 雉子の尾の優しうさはる董かな。秋色
 夏 簪よ、くしよ、さて世はあついこと。花讚
 秋 子を寐せた間を抜け出でて涼哉。同
 秋 朝顔に釣瓶とられてもらひみづ。千代

ことがある。所へ山から餌をあさりに出て来た猿が、不圖之を見つけるが早い。例の猿智慧にかられて、いきなり一臂をこの坊主。といはんばかりに蝮の頭上にくれる。すると、殆ど假死の状態にあつた蝮は、忽ち二本の足を猿の手へかけたかと思ふと、吸盤の力を緊張させて、捲着いたまゝ吸付くと同時に、他の何本かの足を、豫て足場として用意してある水中の岩角にしかと捲きつけてしまふ。そして一呼吸ごとに猿を海中へ引込まうとするのである。始は猿の方で、寧ろ馬鹿げた相撲だ位に考へて、汀のあたりで面白半分に相手になつてゐるが、そろゝ蝮がその入道頭をふり立てて、ぢりぢり敵手を汀の決勝點から中へ引入れ始める頃には、猿

ア物の雨は長として
ふかちふかちもろそり

も渾身の力をこめて力争する。併し、敵は岩の根に數本の足を捲着けて居るに反し、此方は砂地に足の踏みしめ處もない。やがて猿の手から肩のあたりまでが海水に浸るやうになると、本來臆病性の猿公は、いよゝゝ狼狽して、たゞもう「いきい」といつて、山猿の叫び聲を發して、山彦を騒がせるばかりである。

一たい、動物と動物との争鬪は、一見頗る殘忍なやうではあるが、時にはまた、こんな面白味のある場面も少くないので、一種の興味さへ感ぜられる。角と角、牙と牙との鬪争は、人間の目から見ると、いかにも殺伐至極のやうにも思はれるが、しかも發作的本能的な角の突合ひ、牙の裂合ひだけで、た

こんなやうな、蛸に關する断を、餘程以前から時々聽かされた私は、たゞ何となく面白い事のやうに思つてゐたが、今蛸壺を得て人間の争鬪を考へると、猿と蛸との海岸での争やら、蛸の假寢の宿を與へてその死命を制する悪だくみやら、更にそれに類した抗争振などが思ひ合はされて、一種の感に堪へなくなつて來た。(世を拗ねて)

二〇 杉田壹岐

室 鳩 巢

陣を陥れ先登するは、難きやうにて易く、顔を犯し直言するは、易きやうにて難し。然るに、古今、君も臣も、陣を陥れ先登する功を貴ぶことをば知れども、顔を犯し直言する忠を重

徳川幕府の官儒。名は直清。享保十九年歿す、年七十七。

故伊豫守 家康の子忠直。

んずることをば知らず。

越前故伊豫守殿の家老に、杉田壹岐といふものあり。元は

足輕なりしが、その身の材をもて、微賤より登庸せられ、厚祿を受け、國老に列しけり。常に顔を



室 犯し直言して、君の過を匡救する
鳩 ことを忘れず。
巢 或時伊豫守殿在國にて鷹狩し、

いづれも出で迎へしに、今日、若者どもの働、いつにすぐれて見えぬ。あれにては、萬一の事ありて出陣すとも、上の御用にも立つべしと覺ゆるぞかし。その方どもも承りて、いづれも

Handwritten notes at the bottom of the page, including the number 113 and some illegible characters.

喜び候へ。とありしかば、家老ども、いづれも、御家の爲、何よりもめでたき御事にて候。といひしに、壹岐一人、末座にありけるが、黙々としてありしかば、何といふかと、暫く見合はせられしが、こらへ兼ねられ、遊語壹岐は何と思ふ。とありしに、その時、壹岐、只今の御意承り候に、先礼憚りながら歎かしき御事に存じ候。當時、士ども、御鷹野などの御供に出で候とは、先にて御手討にもなるじやわがうゆからなり候はんも計り難く候とて、妻子と暇乞して立別れ候と承り候。かやうに上を疎み候うて、思ひつき奉らず候うては、萬一の時御用に立つべしとは存ぜず候。それを御存知なく、頼もしく思召さるとの御意こそ愚かなる御事に候へ。といひしかば、伊豫守殿、大きに氣色損じければ、何が

しとかやいひしもの、伊豫守殿の刀持ちて側に居たりしが、壹岐に、座を立ち候へ。といひしを、壹岐聞きて、その人をはたと睨み、いづれもは御鷹野の御供して、猪猿を逐うて駆廻はるを御奉公とす。この壹岐の奉公は、さにてはなし。いらざる御奉公こと申し候な。とて、そのまゝ脇差を抜いて後へ投捨て、伊豫守殿の側へ進み寄り、たゞ御手討に遊ばされ下され候へ。空しく長らへ候うて、御運の衰へさせ給ふを見候はんよりは、唯今御手にかゝり候はば、せめて御恩を報じ奉る志のしるしと存じ候はん。といひて、頸をのべ平伏しけるを見給ひて、何ともいはで、奥へ入られけり。

そのあとにて、外の家老ども壹岐に向かひて、御爲を思ひ

は、とかくいふに及ばず、其方が志を深く感じ思うて満足す。との事にて、直ちに腰のものを、も賜ひしかば、壹岐も思ひ寄らぬことにて、覺えず涙に咽びつゝ、拜辭して罷り出でけりとぞ。
有名作家 堂嶋 筆の書は、千人を吉宗が侍講を有つた
（駿臺雜話）非常に節操を重んじた、木下尚江を尊重して
道徳を解りた、情談、古事、逸聞を書いた 隨筆
病床の時、それを駿臺雜話として

文學者。
第三高等學
校教授。

一一一 ブロツケン山の遭難 林 久 男

麓の宿を發つて、爪先上りの雪道を辿り、今は救助小屋まで着いた。險道四哩の頂上ももう近い。時は一月の初。處は中央ドイツ、ハルツ山彙中の最高峰ブロツケン山。同行は友と二人。學校の休暇を利用しての冬期登山である。暫く其處に腰をおろして居ると、四邊寂として、眞に心耳

も澄みわたる無人の境である。時々目の前を鷲毛のやうに散るのは、枝をこぼれて來る雪とばかり思つてゐたのに、それは何時しか空を捲き、風を誘うて來る吹雪の前驅であつた。何よりも道を失はぬ先にと、夕暮さへ氣遣はれたので、急いで其處を出ると、直ちに路は險しくなり、頭上に唸る嵐の音が轟々として鬼啾の如く、愈、大吹雪となつて來た。もう頂上も間近いと思ふのに、ホテルどころか、樹木の影さへ見えない。

俄然、友は身を切るやうに鋭く叫んだ。顧みると、我が眼前を、黒く大きく、恰も惡魔の礫の如く擦過する物がある。それは友の帽子であつた。と思ふ刹那、本能的に、一步、二步、三步、其

の後を追ひかけると、折から一陣の突風に、その黒い塊は、無限の彼方へ吹飛ばされて行つた。はつと氣付いて顧みると、友の姿は、渦まき吹雪に隔てられて、影さへ見えない。飄々の轟音に交つて、只僅かに我が名を呼ぶ聲が聞えるばかり。其の聲をたよりに、右に左に呼び捜せど、姿はおろか、やがて其の呼ぶ聲さへ聞えなくなつた。今は心身疲れ、雪に半ば盲いた自分は、狂ひ求める衝動の代りに、俄然其の一瞬、冷たく重く、一閃嚴肅なる豫感に襲はれた。

「ブロッケンを……運命の墓に……」

と、氣が付くと、其の刹那、不思議にも俄に心神が平靜になつて、恰も神意に牽かれるやうに、五六歩すたくくと歩を運

んだ。急に祈りたいやうな氣分になつて、目を上げようとすると、其の瞬間、右手前へ、恰も亡靈のやうに友の姿が近づいて來た。無言に自分を抱へに來た彼の睫には、涙の雫がうるんでゐた。彼は自分と同じく、運命の墓場に行く覺悟を固めて居たらしかつた。見れば、其の頭から、顔から、體へかけて、寸餘の雪は鎖し凍つてゐた。

「どこか窪みで凌がう。」

「いや、却つて窪みへ這入ると、睡氣を催して、愈、助らない。」

「さうだ、歩かう、行ける處まで。此の吹雪ぢやもう九分九厘助るまいと思ふが。」

云ふ内に、更に吹雪は狂暴を逞しうして、轟音は耳を劈くば

かり、人間の此處に立つて居るのを嘲るものの如く、今にも寸裂きにして、八寒地獄へ逆落しにしてしまひさうである。死ぬも神意、生きるも神意と眩きながら、漸く辿りついたレールをたよりに、頂上と思ふ方へ疲れた足を運ぶと、次第に雪は深くなつて、脛を没し、膝を没し、しかもレールはあらぬ方へ走つてゐるらしい。もう夕闇が濃くなりかゝる。助らないと直覺した二人は、三途の川にでも突立つたやうに、暫く其處にぢつと佇んで、途方にくれてゐた。

ふと其の時、頭上を、雲霧の如くとざしてゐる吹雪の中から、妖魔か人か、一塊の黒いものが、無間地獄へでも落ちて來るやうに、唸り音を立てて駈けて來た。

レール
夏期の登山鐵
道のレール。

自分等は思はず聲を立てた。疾風の如く擦過して行つた黒い塊は、急に脚下で踏止つて、やがてこちらへ動いて來る。見ると、スポーツ服に身を固めて、雪橇に乗つた一人の男であつたが、此の吹雪の中で我等を見出すことは、我等が彼を見出したよりも意外であつたらしい。

「ブロッケンのホテルは何處にありますか。」

訊いても、彼は暫く眼ばかりぎよろつかせて黙つてゐたが、やがて堅唾をぐつと飲んで、口を開いた。

「まあ、あなた方は、何といふ様子をしていらつしやる。」

實際彼の驚くのも無理ではない。見れば自分等は、頭から胸から足さきまで、丸で雪の塊のやうになつて、眉毛はサンタ

クローズのやうに、長く白くほゞけてゐる。

「安心なさい。まだお命はありますよ。ホテルは此の方向二三分です。」

着いて見ると、果して二十間と隔てない處にホテルはあつたのである。ホテルの人達は、自分たちの様子に何れも愕きの目を瞠つてゐる。雪達磨のやうに體に凍え付いた雪を融かして、やがて通された室の窓から見ると、すぐ間近に立つ物見の塔さへ、吹雪に包まれてゐる。

其の大吹雪は二晝夜に亙つて荒れ狂つた。

もし此の夜中を吹雪にさらされて居たなら、又あの救ひ神の如き櫓の人に會はなかつたらと想像すると、今でも私

は悚然たらざるを得ないのである。

二二二 花 火

岡 本 綺 堂

俳句では花火を秋の季に組入れて居るが、どうもこれは夏の物らしい。少くも東京では夏の宵の景物である。

衰へたと云つても、兩國の川開に、江戸の花火の傍は幾分が残つて居る。併し私は川開式の大花火を餘り好まない。由來何處の土地でも、大仕掛の花火を誇とする傾が有るらしいが、徒に大仕掛を競ふ物には、どうも風趣が乏しいやうである。花火は寧ろ子供達が弄ぶ細い筒の火に限るやうに私は思ふ。

文學者名は敬二。

兩國

東京市内隅田川に架けた兩國橋附近の稱。毎年七月二十日頃川開の花火を揚げる。

私の子供の頃には、花火を揚げて遊ぶ子供が多かつた。夏の永い日も漸く暮れて、家々の水撒も一通り済んで、町の灯がまばらに燦いて來ると、子供達は細い筒の花火を持ち出して往來に出る。其處らの涼臺では團扇の話聲が聞える。子供たちは往來の真中に出るのもある、薄暗い立木の蔭に集まるのもある。さうして思ひ／＼に花火を打揚げる。固より細い筒であるから、火は高くは揚らない。せい／＼二階家の屋根を越えるくらゐで、ほんと揚るかと思ふと、直ぐに開いて、直ぐに落ちる。誠に單純な、誠にあつけないものであるが、薄暗い夜の町で、其處にも此處にも、此の小さい火の飛ぶ影を見るのは、一種の涼しげな氣分を誘ひ出す物であつた。

白地の浴衣ゆかたを着た若い娘が、蟲籠を下げて夜の町に行く。子供の小さい花火は、其の行く手を照らす如く低く飛んでゐる。斯く書くと、それは繪である。と云ふかも知れない。併し私達の子供の時は、斯う云ふ繪のやうな風情は珍しくなかつた。繪としては、勿論月並の畫題でもあらうが、偕實際にさう云ふ風情を見ると、誠に夏らしいのである。廻燈籠、蟲籠、蚊遣の煙、西瓜の截賣、斯うしたものが都會の夏の夜らしい氣分を作り出すとすれば、子供



たちの打揚げる小さい花火も、慥かに其の一部分を擔當して居なければならぬ。

花火は普通の打揚げの外に、鼠花火、線香花火の有ることは説明するまでも有るまい。鼠花火は、いたづら者が人を嚇して喜ぶのである。線香花火は、小さい兒や女の兒を喜ばせるのである。其の外に幽霊花火と云ふのも有つた。これはお化花火とも云つて、鬼火のやうな青い火が、とろ／＼と燃えて落ちるだけであるが、いたづら者は、暗い板塀や、土藏の白壁の蔭に隠れて、蚊に食はれながら、其の鬼火を燃やして、臆病者の通り掛るのを待つて居るのであつた。

私の子供時代と、今は世の中が全く變つてしまつた。大通

花火間もなき光かな
—「二兩が—
—其角—

りには電車が通り、横町にも自動車や自轉車が驅込んで來る。春の紙鳶も、夏の花火も、秋の獨樂も、段々に子供の手から奪はれてしまつた。今では場末の寂しい薄暗い町を通ると、時々昔懐かしい子供の花火を見ることもある。神經の尖つた現代の子供たちは、恐らく此の花火に對して、其の昔の私たちが程の興味を持つて居ないであらうと思はれる。花火間もなき光かな、などと云つて、昔から花火は果敢ないものゝに謳はれてゐるが、其の果敢ないものの果敢ない運命も、やがて全く滅び盡くして、花火と云へば、兩國式の大仕掛の物ばかりであると思はれるやうな時代も來るであらう。どんな精巧な螺旋仕掛のおもちやが出來ても、あの粗末な細い竹

筒が割れて、赤い火の光が涇々と揚るのを眺めてゐた昔の子供たちの愉快と幸福とを想像する事は出来ない。

花火は夏の物であると私は云つた。しかし秋の宵の花火も亦一種の風趣が無いでもない。鉢の朝顔の蔓が段々に伸びて、朝夕はもう涼風が單衣の襟にしみる頃、まだ今年の夏を忘れ得ない子供達が、夜露の降つた町に出て、未練らしく花火を揚げて居るのもある。勿論、其の数は夏の頃ほどに多くは無い。秋の螢——さうした寂しさを思はせるやうな火の光が、處々に揚つて居ると、暗い空から弱い稻妻が時々落ちて来て、其の光を奪ひながら共に消えて行く。子供心にも云ひ知れない淡い哀愁を誘ひ出されるのは、かういふ秋

の宵であつた。

俳人。
名は藤吉。

二三三 清水

萩原井泉水

岩の窪みに湛へられてゐる清水、そこには象牙細工のやうな白い美しい蟹が遊んでゐたりする。木の根からにじみ出る清水、そこには草の葉が水滴の爲に揺れて、休むことなくかぶりを振つてゐたりする。清水は淋しいものである。大島から三宅島通ひの船に乗つたが、烈しい西風に吹立てられて、新島の本村へさへも船を寄せる事が出来なかつた。小さな舳船で、漸く新島の或濱へ漕ぎつけられた時は、本當に漂流した者のやうな便りなさであつた。浪音に沿うて

ゐながら、椿の密林の爲に薄暗く、齒朶しだの茂りの中についてゐる細い徑に、私は船暈ふねうずのまだ癒えない、ふら／＼する體を運んだ。咽喉は渴き切つてゐたが、どうすることも出来ない。辛うじて二里ばかりを來た頃、路傍に始めて清水を見出した。嬉しさは、喩へやうがなかつた。其處にはお寺があつた。もう人里も近いと見える。私は全く救はれたといふ氣がした。富士の裾野を旅した時、行けども／＼青い草原に、きりぎりすが淋しさうに鳴いてゐるばかり、暑い日がじり／＼と照渡つて、日蔭をつくる木立さへも無い。人には逢はない。鳥も啼かない。さうした路に疲れ切つた時、ふと學生らしい旅人に逢つた。清水のある處はありますか。」と、私が斯う云つ

た言葉と、「人穴村までどの位ありますか。」と向うで問ひかけた言葉とが、同時にぶつ／＼かつた。そこらは見渡す限りの平野で、大きな牧場にでもと思はれるが、水といふものが絶えて無い爲に、生き物を飼ふことは出来ないものであつた。清水のない處には生命が無い。私達が汗を流しながら旅をしてゐる時は、生命の泉を尋ねるやうな氣持になりきる事がある。

夏の野の旅をした事のある人、又は山に登つた人は、清水の味を覺えない事はあるまい。暫く時を経てから、其の旅の事を思ひ起して見ると、そこに清水のあつた邊りの事が、一番鮮かな印象に残つてゐるものである。人里離れてゐる處

でも、路傍に清水があれば、大抵一軒の人家があるものだ。大きな木を^割つた槽から、惜しげもなくさらさらとこぼれる水が、不斷に生じて不斷に流れ去る。時といふものを思はせ、障子を開けて、内には老婆が一人、絲車をわくわくと廻はしながら、毎日々々同じやうな、時を繰つて飽かないのである。そこを通る旅の者は、軒先の清水を所望しながら、そこに住む淋しい人と、何か言葉を交さないではゐられない。又は、深い山の中で、人家などは勿論無く、人の通る事も稀であるらしい處でも、ふと見出された路傍の清水に立寄つて見ると、誰か辨當を使つたらしい飯粒がこぼれてゐたり、手^あすさびに摘んで來たらしい花が挿してあつたりする。いつかこゝを

通つた人が、こゝで休んで行つたのかと思ふと、同じ路を先へ行く者、後から行く者の懐かしさも感じられる。
 清水といふものは、實に幽邃な地境を思はせるものだが、それでゐて、又不思議に人間生活の親愛を感じさせるものである。昔、西行が吉野山に隠れて、柴の庵を結んだ時も、彼はなるべく人里から遠い處を選ぶと共に、そこに清水の滴る處を選ばねばならなかつた。とくくと落つる岩間の谷清水^{ほろもろいかなすかき清水}汲みほす程もなき住ひかな。と詠んで、彼は此の清水を以て命を支へてゐた。それから三百年の後、芭蕉がそこに訪ねて來た時には、西行の庵は朽ちてゐたが、其の清水は苔にも隠されずにあつた。かのとくくの清水は、昔にかはらずと

水張の繪絹のやうにつゞいてゐる。

止れ、其處に、

美しい水よ。

瞬間、眞蒼の空はうつとりと水鏡する。

おゝ、静かな天上の夢よ……。

私は心ゆくまで其の幸を飲む。

それは輝く新鮮さのなかに、果てもなく

忽ち失はれ、忽ちに浮かぶ……。

見よ！

波の子供らは、白い花と笑ひながら

一散に渚を登る。(日本詩集)

二五 作文

島崎藤村

文學者。
名は春樹。
隅田川
東京市を貫流
する河。

十七八歳の頃、私は隅田川で泳いだ事がある。全く水には
經驗の無かつた私も、漸く岸を離れることが出来るやうに
なり、次第に川の中流までも進み得るやうになつて、一夏も
水泳場へ通ふうちには、向うの河岸まで泳ぎ越すことが出
來た。更に復一夏も泳いで見たら、焦つて水ばかり飲んで居
た頃に、よくわからなかつた水勢の速い遅いも分つて來た

し、眞水と潮流の混り合つたあの川の中の冷たいと温かいも分つて來たし、水鳥の様に浮きつ沈みつする他の泳ぎ手の光景を、泳ぎながらに見る事も出來た。板子なしには溺れる外なかつた私も、二夏の末には、優に隅田川を往復した。私は普通の泳ぎ手が行ける處までは、自分も到達し得たやうに感じた。けれども、それ以上に進むことは中々容易でなかつた。私の身體は水に重かつたから、樂に浮身の出來る人を見たり、拔手の上手などを見た時は、全く感嘆してしまつた。文章の道でも、誰にでも到達し得られるやうな境地があるに相違ない。そして、根氣さへあれば、そこまで行くことは決して難く無いに相違ない。

信州の小諸こもろに居た頃、私は弓を稽古した事がある。誰でも最初のうちは、的に向かつて矢を當てることばかりを心掛ける。たゞ中てさへすればいい。さういふ時代には、幸に一本の矢が的を貫くことはあつても、他の矢は思もよらぬ場所へ飛んで行く。射手の心に頼む所無く、矢の曲直を辨別する力も無く、さうして幸に中つた矢は、高慢で煩い、熟練を思はせるばかりだ。小諸に住む舊士族の一人で、弓術に心得のある老人が、私達の矢場へ來た。其の老人が、先づ「姿勢」を正すことを私達に教へてくれた。それからの私達の矢は、たとひ的を貫くことが出來ないやうな場合でも、一手揃つて同じ場所へ行くやうになつた。

これは文章の道にもあてはめて見ることが出来る。唯好き文章のみ作らうと思つて焦心することは、決して目的を達する道ではない。眞に好き文章を作らうと思ふものは、どうしても先づ「自己」から正してかゝらねばならない。同じ頃、私は家の裏にある畠へ出て、鋤を執つたことがある。讀書のかたはら、よく其の鋤をかついで行つて土を耕して見た。私は先づ、荒れた畠の地面を掘り起す事から始めた。土を碎いた。小石を擇り分けた。地ならしをした。汗を流してそれをやつた。葱の苗や、馬鈴薯の芽のやうな植ゑ易いものから作つて見た。其の畠には、大根、白菜、茄子、豌豆、胡瓜などの類をも植ゑて見た。草を取りに行き、さくをかけに行つた。馬

鈴薯の花が白く盛りな頃に出て、試に土の中を探つて見ると、はや圓いのが幾つもく、根元の方から出て來た。豌豆の蔓は長く延びて人の丈よりも高くからみついた畠の中には、嫩かくなつたのを摘む鋤の音が聞えた。粗末ながらも自分で作つた新鮮な野菜が、私の食卓に上るやうになつた。それから私は周圍にある耕地を見て廻はり、本當の百姓の手で好く整理された畠の間などを歩き廻はる度に、耕作の苦心といふものが、痛切に自分の身に感じられるやうになつた。私は或耕作地を通つて、非常に嚴肅な念に打たれたことを、今でもよく思ひ出すことが出来る。

われく、が文章の手本とすべきものは、何程われく、の

周圍にあつても、それを悟らないことには仕方が無い。それを悟らうとするには、どうしても先づ自分で試みなければならぬ。試みる。といふことは、悟る。といふことの始だ。

淺草の新片町に住んだころ、家は淺草橋や兩國橋に近くて、私はあの隅田川の界限を漕廻はつたことがある。最初のうちは、無闇に手足を動かさず、あの長さ一丈ばかりもある艀を、前へ押し手許に引きして骨折つて見た。それでも舟は思ふやうに進まなかつた。次第に私は手足を動かすことが少なくて、身體全體の力で、ゆつくり艀を押すことが出来るやうになつた。向うから大きな傳馬がやつて來たぞ、あれに一つ衝きあたらぬやうに。さう思つて漕いで行く樂みなども

それから起つて來た。それから船頭のする所を見ると、實にゆつくりしたものだ。そこには力の省略がある、簡素の美がある。

文章の道にも、無闇に筆を弄することが、決して自己の眞の「表白」とはならない。

眞に好い文章には、眞に好い「結晶」の力がある。(飯倉だより)

二六 原總右衛門の母

下田歌子

播州赤穂の城主淺野内匠頭長矩、元祿十四年の春三月敕使下向の際、殿中に於て吉良上野介義央を刃傷に及びける罪科によりて自盡を命ぜられ、采地を沒收せられぬ。是の故

教育家。
國文學者。
私立實踐女
學校々長。

に、其の老臣大石内藏助良雄は原總右衛門元辰等と相謀りて復讐を企てたり。

爾後大石は京都に住し、原は猶留りて赤穂の城下に住し、時々密使を交換し、書狀を以て互の意思を通じたりけるが、一日總右衛門は老母の傍に侍して、さまざまの物語の序に言ひけるは、此の度餘儀無き用事の出で來て京都へ上らんと存じ候が、事によりては江戸迄罷り越すやも計り難く、若し左様の事にも相成り候はば、一月餘は日を費し申すべし。留守中は定めて御徒然にて、御不自由の程もさこそと推量り參らすれども、暫時身の暇を賜ひ候へ。」といふ。

母はつくづくと我が子の顔を打ちまもり居たりしが、い

君辱めらるる時は

「爲人臣者、君愛臣勞、君辱臣死。」(國語)

やいや、汝一度此處を去りて江戸表へ罷り越すならば、よも再びは歸り來らじ。是今生の別れなるべし。」といはるゝに、總右衛門打驚きて、如何答へんとたゆたふ程に、母は重ねて、汝驚くこと勿れ。そも武士の家に生まれて、譜代恩顧の主の爲に身を致すは誠に至當の事ならずや。古語に曰く、「君辱めらるゝ時は臣死す。」と。君に忠なるは親に孝なるぞ。必ず母に心を残さずして、一日も早く亡君の爲に修羅の妄執を晴し奉り、忠義の道に潔く相果てんこそ母のこよなき望なれ。何のたゆたふ事かは。」と、勵まされたる母の詞に、總右衛門は覺えず感涙に咽び、誠は早くより大石殿と心を合はせて、内々復讐の支度を整へ候へども、事の漏れんことを恐れて、父母妻

子にも語るまじとの神文誓詞を仕り候故に、今日まで母上にも御明し申さざりしを、何卒御免し下されかし。」と言ひければ、母大いに悦びて、急ぎ旅立の用意ども取整へてぞ出し立てける。

さて、原は山科なる大石が家に往きて見るに、近き頃より良雄は病床に在りて、うめき居たりければ、いたく驚き憂へて、心を盡くして看病しけるに、病は思ひしよりも頓に怠りがたになりぬ。今は心安しと思ふものから、猶關東へ下らんことは覺束なく、暫時かくて保養あるべきことと、人々いひ合ひけり。總右衛門も、げに然るべしと同意して、さらば我も今一度立歸りて母の安否を問ひ來んとて、更に赤穂へ取つ

山科
山城國宇治郡
にあり。

て返し、しかぐと告げけるに、母も始は何事か打案じ居たるが、漸くに氣色直りて、さらば久々にて、諸共に一獻酌まんと、手づから酒肴を調じて、子にも勧め我もまゐりて、宵過ぐる頃までいと心地よげに打語らひて、明日を契りて各、臥所に入りぬ。

かくて、夜明け、日は昇れども、母の起きて出で來らざるに、總右衛門いぶかしみて、下婢をして、やをら其の寢所を伺はしめけり。下婢は寢所に入るや否や、あつと叫びて轉び出でぬ。原驚きて入りて見れば、こはそも如何に、母は、懷劔もて喉をさし貫きて自盡して、うつ伏しに臥し居たり。餘りの事に涙も出でず、騒ぐ心を強ひて押鎮めて、物やあるとあたりを

見れば、果してその枕邊に一封の書あり、披きて讀めば、かくぞ書かれたる。

一筆申残しまゐらせ候。常々孝心深きことは詞にも述べ盡くし難し。殊更、母の事を思ひて、故郷へ立歸るなどの心づかひ、我が身にとりては如何ばかり悦び入り候へども、まづ討入といはん時、ふと母の身の上を思ひ出し給ふならば、進む勇氣も忽ち挫けて、敵に内兜を見られ給はんか。これ全く母の存命故と存じ候まゝ、惜しからぬ老の命、今宵先立ち申候。是も子を愛する道にもあらんと、女心の一筋に思ひきはめたるにて候。此の上は跡に心残りなく、吉良殿は亡君の仇、母の敵と思ひつめて、討入り給ふものな

らば、鋭き手柄を致され候はんと安堵致し參らせ候。何事も最期を急ぎ、草々申残し候。

母

原總右衛門殿

總右衛門は此の遺書を見て、心弱く立歸りしことを後悔すれども、今は何の甲斐あるべきにあらねばと、ますく志を勵まして、直ちに京に取つて返しぬ。かくて吉良家討入の夜は比類無き手柄をあらはしけり。

まことに、此の母にして此の子ありとは、此等の事をやいふべき。あはれ我が子を勵まさんとして、自ら死を急ぎし母の心は、いとをしくも、また傷ましき限なりかし。

心學者。
名は亭。
京都の人。
天保十年歿
す、年五十
七。

お年寄

町年寄。名主
を管す。

町役

町役人の略。
名主・五人組
等をいふ。

二七 南京の壺

柴田鳩翁

さる御町内に婚禮振舞がござりました。お年寄をはじめ、町役・家持の人々、一同に座に着きますると、さまざまの馳走がある。時にかの年寄は、酒と聞いては笹の露にも酔ふほどの下戸ぢや。座中を廻はる盃の間、退屈さうにしてゐられると、亭主方が氣の毒に思ひ、「お年寄様は御酒は召しあがらず、御退屈にござりませう。ちとお菓子なりとも御取り下され。」と、南京の古染附の壺に大輪の金米糖を入れて、年寄の前へ持つてくる。座中も、「これはよいお心づき、ひらにお菓子をめしあがれ。」と勧めると、年寄もわるうはなし、「しからは頂戴を

景清・美保
の谷
悪七兵衛景清
美保の谷十郎

致しませう。」と、壺を引きあげ、手首を突つこみしなに、少しきしむやうに覺えたが、無理に手を差入れて撮み出さうとするに、手首がつまつて抜けませぬ。どうぞして抜けるかと、色色にこじまはして見ても、引つばつて見ても抜けず。まごまごして居られると、側から見つけて、「どうなされましたぞ。」いや、手が少しつまりまして、思ふやうに抜けませぬ。」と、眞顔になつて云はれる。「それはお氣の毒。私が壺を持つて居りませう。無理無體に手をお引きなされ。」と、一人が向うへ廻はつて、壺をつかまへ後へ引くと、年寄は手を前に引く。互に「えいや」と引合ふ有様。景清と美保の谷が鐵曳をするやうなと、座中が一同にどつと笑へど、年寄はなか／＼笑はず、泣顔になつ

て、「どうも痛んで抜けませぬ。」といふ。さあ、これから大騒になり、「醫者どのを呼んで来い。骨接ほつぎではゆくまいか。」と、酒宴の興も醒めはてました。

時に、五人組が一人進み出で、「いづれもお騒ぎなさるな。われら承つたことがある。」昔、司馬溫公と云ふ人、幼きとき、大勢の小兒と共に、大いなる壺のほとりに遊びましたが、一人の小兒、誤つてかの壺の中へはまりました。大勢の子供はこれを見て逃歸つたが、司馬溫公ひとりは歸らず、側なる手ごろの石を取つて、かの壺へ投げつけましたれば、壺は割れて、はまつた小兒は不思議に命を助りました。」と、ある人の話ぢや。今、お年寄の御難澁は、此の話に能う似てゐる。いざや、我らが

司馬溫公

名は光、字は君實、溫公は諡。宋の名相。

司馬溫公となつて、譬へば、その古染附の壺が、失禮ながら何程高金の品でも、お年寄の腕には換へられぬ。」と、しかつべらしく煙管をひつさげ、向うへ廻はれば、年寄は氣の毒さうに、壺をかぶつた手をつき出すと、只一打に打碎いた。何がさて、座中は金米糖がちらかつて雪を降らしたやうになると、「やれ、お年寄お助りなされたか。」と、その手を見れば、抜けぬこそ道理、金米糖を一杯攫んでゐられたと申すことぢや。なんと可笑しい話ではござりませぬか。

攫んだものを放しさへすれば、自由自在に手は抜けたものを、一度攫んだら、首がちぎれても放すまいと、片意地な生まれつき。それで、自由自在の大安樂が出来ぬのぢや。かく申

せば錢金の事のやうなれど、攫む物はこればかりではない。器量のよいのを攫み、賢いのを攫み、負けをしみを攫み、家柄を攫み、身代のよいのを攫んで、放すまいとかつぎ歩くによつて、教を聞くこともならず、樂をすることもならず、慎も出來ず、せん方なさに、癪氣抑へたり、顔しかめたり、酒飲んで紛したり、さりとは氣の毒なものでござります。壺割つてしまうてからは、何と云うても詮ないことぢや。身代の壺を割らぬさき、御用心が第一でござります。(鳩翁道話)

二八 ナイチンゲール

歐人の公園地とも云ふ可き伊太利の風光明媚なる一都

詩經 書 易
春秋 左傳 禮記
四書 大學 中庸 孟子
論語

naiching girl

天子ノ妃 フリ后
諸候ノ夫人 秋
夫を三すけ

士 事
婦人

禮記
カ、リ、ス、ム
儀禮
上下、各、人、一、
下に、ハ、リ、ム、人、
六、カ、

府をフロレンスと稱す。西曆一千八百二十年、富裕なる英國の一紳士、夫人と共に遊歴の途次、こゝにしばらく逗留して、一女兒を擧げたり。處の名をそのまゝに、フロレンス、ナイチンゲールと名づけぬ。これなん歴史に一光彩を添へて、萬人に祝せらるゝ名なりける。世の史に、史は事と記す也。
フロレンス女史は、豊かなる田舎紳士の家庭に、何の心配もなく生ひ立ち、古文辭、數學、語學等、その頃の女子としては、周到の教育を受けたり。天性慈悲の心深く、六七歳の頃より、人形の介抱、犬猫の療治等を遊戯とし、病人、怪我人を介抱するを樂みとしたりき。
さる程に、女史は遍く世の苦痛者、疾病者の友たらんと志

物事を度々指示する

二八 ナイチンゲール

外屬内在
レニニテ
ビナリ
ようゆうはわうしてモロのや
セー、ミと

して、先づ英國各處の病院を訪ひ、一千八百四十四年より、殆ど十年の久しき資を齎して歐洲諸國を歴遊し、各國の病院及び看護制度を仔細に觀察し、或は自ら看護婦となりて、熱心に看護の法を實習し、或は倫敦の一病院を整理せしが如



ルーゲンチイナ

き、實に、女史が實力を養成して、他日の準備をなせるは、この時にあり。女史嘗て人に書を與へて曰く、すべて一の事業に就かんと欲する妙齡の淑女諸君に向かつて、一言を述べん。男子が其の事業の準備を爲す如く、諸君も亦まづ其の事業を爲さん資格を作れ。さらでは、事業を爲し得んと思ふなかれ。又諸君、若し男子

の事業を爲さんと欲せば、女子の往々に陥り易き不精密荏弱等の弊を去れ。諸君自ら男子の爲すが如く、事務の法則に従へ。諸君はこれによりて、始めて事業を成功せしむるを得ん。と。この數句、女史の精神を表し得て明白なり。ある人嘗て女史を評して曰く、彼の女は天鷲絨の聲と、鋼鐵の意志とを有する人なり。と。實に、女史は十年の準備、まづ其の資格を作り、事務的技倆及び鋼鐵の意志、以て其の成功を致ししものなり。

準備の後に實行あり。十年の修練、今や大いに發揚すべき時は來りぬ。一千八百五十四年、東歐にクリム戦争起れり。此の戦争の始に、英佛の聯合軍は著しき武勇の働せしが、

クリム戦争
ロシア帝ニコ
ライ一世が西
曆一八五三年
トルコと交戦
せしを、佛帝

ナポレオン三世が英國と同盟してトルコを扶け、一八五四年九月クリム半島に上陸し、大にロシア軍を破りたる戦。

運送不便、監督不行届の爲に糧食缺乏し、加ふるに陣營の衛生足らず、且適當なる病院看護者なきが爲に、健康なる者は病み、病みたる者は死し、陣中は一大病窟となりぬ。

歴史の記す所によれば、クリム戦争の死亡者中、戦死せし者は極めて少數にして、殆ど十中の九は病に斃れたる者なり。而して、初七箇月間に死亡せる兵士の數は甚だ夥しく、若し此の割合にて進まば、征討の全軍は一年半にして死に盡くすべき有様なりき。これ等の事實英國に聞ゆるや、國民の悲歎限なく、皆東方の天を望み、涙を流し胸を拍ちて救濟を叫べり。

是に於て、女史は時の陸軍大臣に一書を寄せて、自らクリ

ムに赴き、病院整理衛生監督の任に當らんことを申し出でぬ。

心は心といかに相響くものぞ。女史が陸軍大臣に寄せし書は、大臣が女史にクリム出張を依頼せる書と、恰も中途にて行逢ひ、女子はこゝに其の志望に背かず、クリムに於ける衛生病院に關する全權を與へられぬ。女史は直ちに四十二名の篤志の婦人と共に、白帽白衣、故國に別れ、クリムに向かひて出發せり。

女史がクリムに着するや、恰も好し女史の決心と手練とをためさん爲なるかの如く、インケルマンの大戦争はその明日を以て行はれ、多くの月を経ざるあひだに、女史の保管

の下に來りし傷病者の數は、實に一萬の夥しきに及べり。此の莫大なる患者を引受けし女史の勞は果して如何なりしか。女史は、其の身體の虛弱なるにもかゝらず、柔和なる仁徳の光と、鋼鐵の如く堅固なる意志の力とを以て、あらゆる困難と戦ひ、呻吟怒罵呪咀汚穢饑餓惡疫を以て充ち滿ちたる戦地病院は、月を出でずして、清潔にしてかつ秩序整然たるに至れり。

あゝ、光明の入る所、暗黒も亦容を變ず。彼の女の來りしより、病院は靜肅清潔なること聖會堂の如くなりぬ。と、これ、一病兵の人に語りし所なり。時としては、兵士、外科の手術を受くるを拒みて、言ひ争ふことあれども、女史來つて其の床邊

に立ち、溫言以て諭すこと二三語、すなはち彼は黙して其の手術を甘受す。我等は彼の女の過ぎ行く姿をだに見れば、満足して枕に就けり。と、これ、他の一傷兵の陸軍大臣に語りし所なり。

かくて、一千八百五十六年七月、英軍、土耳其を引拂ふまで、女史の戦地に在る殆ど二年に近かりき。

女史の英國に歸るや、上、女皇より、下、勞役者に至るまで、争うて大いにこれを歓迎せり。女皇は感謝の手書と、金剛石を鑲せる十字架とをこれに賜ひ、土耳其帝も、亦寶石を鑲めたる腕環をこれに贈り、有志者は義捐金五萬圓を集めてこれに贈れり。その他、有志者より寄せたる物品、謝狀は積んで山

下カ
ン

をなせり。而して女史は此の金を私すべきにあらずとなして、これを聖トーマス其の他の病院に寄附して、看護婦養成の資に供しぬ。

多くの辛勞を以て、多くの生命を救ひたる女史は、爲に痛く健康を害し、且女史の性質、元來退隱を好めるが故に、爾來女史は公然世の表面に立ちて活動すること少かりき。然れども、有爲なる女子は、多病の故を以て安息せず。而して健忘なる世人も、女史の名をば終に忘れ得ざりき。政府は印度軍隊衛生のことに就きて、しばしば女史に向かひて助言を求むる所あり。かくて、女史はクリム從軍以來、深く心を軍隊の衛生及び社會の衛生問題に潛め、實際に、又學理に徴して著し

し數篇の書は、皆切實にして、斯の道の良指導たらざらばあらず。

女史が、クリム戰爭に、始めて戦地看護の實例を天下に示し、しより後十年、歐洲諸國の有志、瑞西の國都ゼネヴァに會して、戰爭に於ける傷病者取扱の状態を改良せんことを圖り、すべて野戦病院は中立とし、其の内にある者及び之に關係する者は、戦闘員以外の者と見做すことに定めたり。これ所謂赤十字社の濫觴にして、女史はその先進者として、其の創立の事に關しては直接、間接の助をなせること少からざりき。

かゝる空前の大事業を成功せし女史は、實に一千九百十

年八月病を以て歿せり年九十一。

新編女子國文 卷五終

大正十四年四月二十日 文部省檢定 高等女子學校用

大正十三年十月二十四日印刷
大正十三年十月二十七日發行
大正十四年一月十日訂正印刷
大正十四年一月十四日訂正發行

新編女子國文(全十册)

卷一、三各金參拾九錢	昭臨	卷一、三各金六拾六錢
卷二、四各金參拾八錢	和時	卷二、四各金六拾五錢
卷五、六各金參拾七錢	年定	卷五、六各金六拾參錢
卷七、八各金參拾六錢	度價	卷七、八各金六拾壹錢
卷九、十各金參拾四錢		卷九、十各金五拾八錢

不許複製

發行所

東京市神田區錦町一丁目
(振替東京四九九一番)

印刷者

發行者

編者

株式會社 明治書院

東京市神田區三崎町三丁目一番地

取締役社長 鈴木友三郎

株式會社 明治書院

東京市神田區錦町一丁目十番地

大島庄之助

佐藤球

電話神田(25) 一四一四番

